

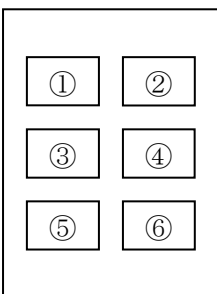
農業・農地を活かしたまちづくりガイドライン



平成20（2008）年3月



東京都産業労働局



表紙の写真

- ①高層住宅と牛舎（八王子市） ②量販店の直売コーナー（調布市）
③農業ボランティアによる収穫（日野市） ④水田裏作のチューリップ畑（羽村市）
⑤農地は災害時の身近なオープンスペース（国分寺市） ⑥小学校の農業体験学習（稲城市）

は じ め に

東京の都市農業は、都民の食卓に新鮮で安全・安心な農畜産物を届けるとともに、緑豊かな農地は、生活環境に潤いと安らぎを与えるなど、都民生活に多くの役割を果たしています。

特に、近年は、消費者の目の前で生産された安心できる農畜産物への期待や、ライフスタイルの中に農業を取り入れたい人々の増加など、多様な都民ニーズを積極的に農業経営に取り入れ、東京独自のスタイルを築いてきました。

しかしながら、都市農地は、都市化の影響や、農家の相続などを契機として年々減少を続けており、都市の環境保全や防災など、農地が果たしている大切な機能が損なわれることが懸念されています。

東京都では、今後、都民の皆さんと農業者、行政がしっかりと手を結び、都市農業・農地が都民生活やまちづくりに一層貢献し、魅力ある産業として発展していくことにより、貴重な都市農地を保全していきたいと考えています。

そこで、平成 18 年度から都市農業・農地のあり方について検討を重ね、このたび、「都市と農業・農地の共生」をキーワードに「農業・農地を活かしたまちづくりガイドライン」を策定しました。

このガイドラインは、東京の都市農業・農地が、都市の中で果たしている意義と役割を明らかにし、区市が農業・農地を活かしたまちづくりのプランを作成し、その取組を推進するための指針としてとりまとめたものです。

今後、区市で農業・農地を活かしたまちづくりに取り組む際に、このガイドラインをご活用いただければ幸いです。

平成 20 年 3 月

東京都産業労働局長 佐藤 広

目 次

はじめに

第1章	農業・農地を活かしたまちづくりガイドラインの概要	1
第2章	東京における都市農業・農地の果たす役割	3
1	地産地消を活かした特色ある農業生産	3
2	都市農業・農地の持つ多面的機能	9
第3章	農業・農地を活かしたまちづくりの方向	17
1	都民に安全でバラエティー豊かな農畜産物を提供する	19
2	様々な地場産業と連携して地域を活性化する	24
3	身近で楽しめるレクリエーションの場を提供する	27
4	都会の中の新たなコミュニティーを創出する	31
5	農業を通じて健康で豊かな心身を育む	35
6	都民が安全で安心できるまちづくりに寄与する	40
7	都会の中に潤いや安らぎのある景観を提供する	43
8	地域の農の歴史・文化を大切に引き継ぐ	46
第4章	農業・農地を活かしたまちづくりのモデル	51
1	地場産業連携・活性化タイプ	52
2	レクリエーションタイプ	54
3	地域コミュニティー形成タイプ	56
4	安全・安心まちづくりタイプ	58
5	美しい田園風景保全タイプ	60
第5章	農業・農地を活かしたまちづくりの手法	62
1	区市の農業・農地を活かしたまちづくりの進め方	62
2	農業・農地を活かしたまちづくりへの取組	63

第1章 農業・農地を活かしたまちづくりガイドラインの概要

1 ガイドライン策定の背景

東京の都市農業は、都民に新鮮で安全な農畜産物を提供することを基本的な使命としています。加えて、近年では、農業のカルチャースクールである農業体験農園や、農畜産物の生産・加工・販売による経営の多角化など、農業生産という一次産業の枠を超え、都民生活に密着した産業へと転換してきています。

また、緑の回復が東京の重要課題となっている中で、都市農地は、農業生産活動を通じて、都市の環境保全や防災など多面的・公益的機能を発揮する貴重な緑地空間となっています。

しかしながら、東京の都市農地は、平成7年から10年間で1,400haも減少し、このまま放置すれば、東京から農地がなくなるおそれがあります。

このため、都は国に対し、農地と住宅地が共存共栄できる政策への転換や、都市農地制度・税制度の改善を強く求めるとともに、農作業受委託制度を創設するなど、様々な取組を行ってきました。

今後はさらに、都市農業・農地の持つ多面的機能を一層引き出し、農業・農地をまちづくりに活かしていくことが求められています。

今こそ、大都市東京における農業・農地の意義と役割を明らかにし、都民と農業者の相互理解のもと、都市と農業・農地を共生させていく時です。

このたび、都は、まちづくりを担う区市のこうした取組を促進するため、ガイドラインを策定しました。

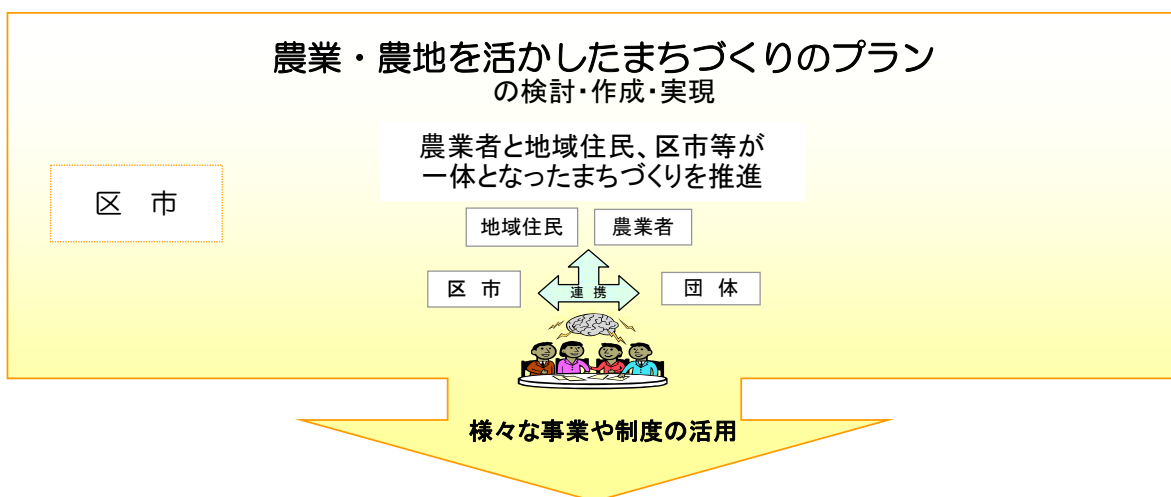
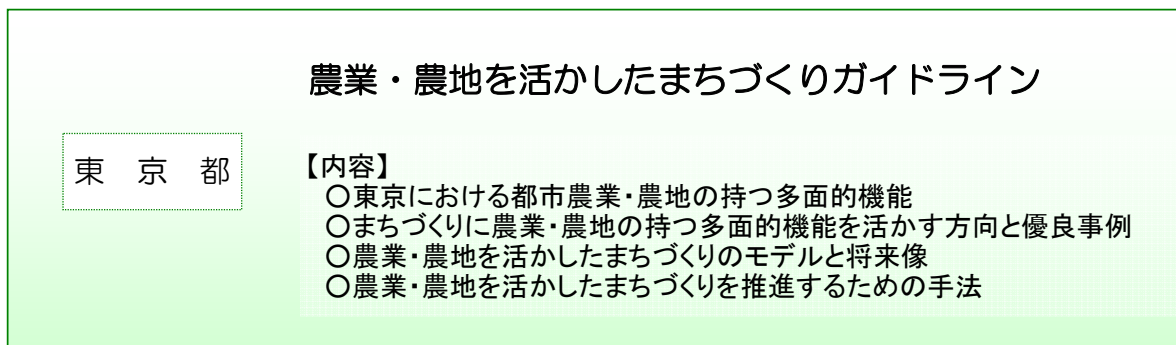
2 ガイドラインの目的

このガイドラインは、「都市と農業・農地の共生」という基本的考え方のもと、農業者や都民、行政などが一緒になって、農業・農地を活かしたまちづくりを実現し、東京の貴重な都市農地を保全していく取組を進めるために策定しました。

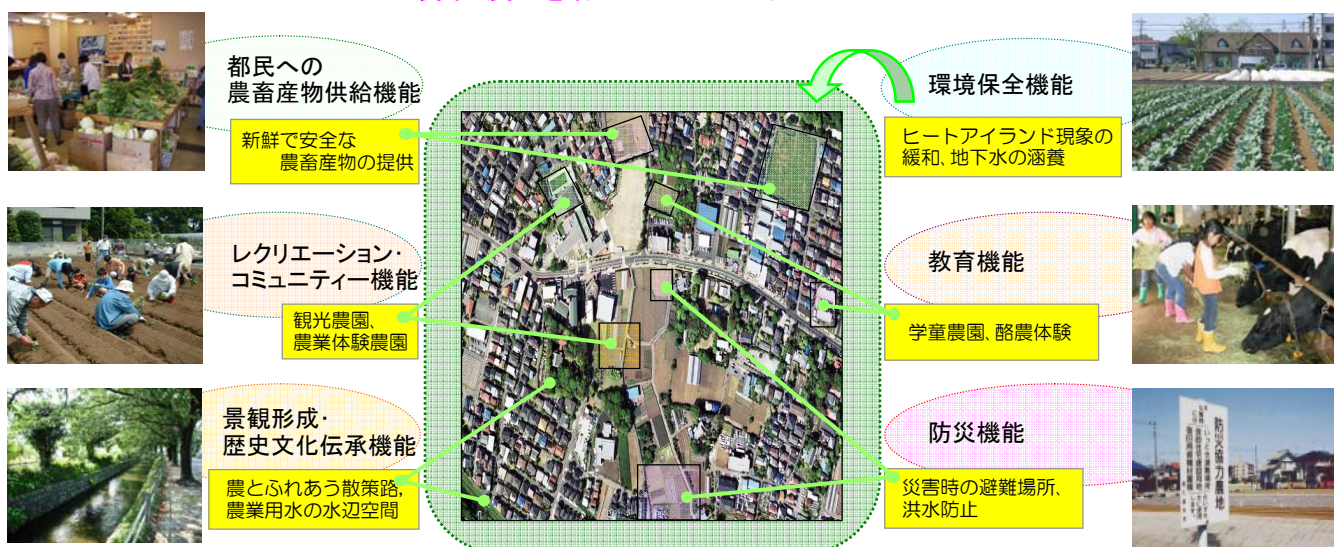
3 ガイドラインの性格

本ガイドラインは、区や市が、農業者や地域住民等の参画のもと、農業・農地を活かしたまちづくりのプランを作成し、その取組を進めていくための指針となるものです。

4 ガイドラインの位置付け



＝農業・農地を活かしたまちづくりのイメージ＝



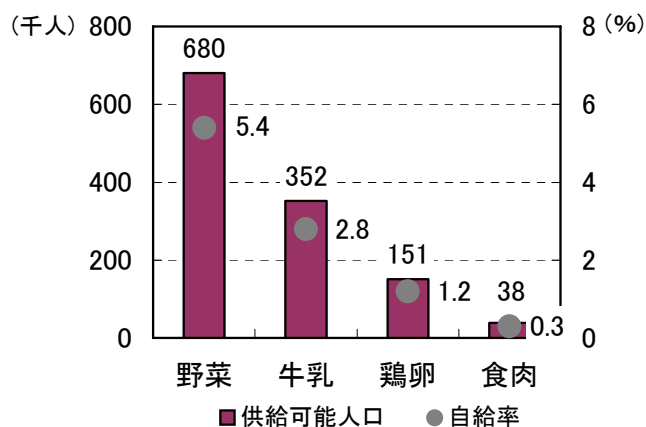
第2章 東京における都市農業・農地の果たす役割

1 地産地消を活かした特色ある農業生産

東京の都市農業は、大消費地に近接するメリットを最大限に活かして、新鮮で安全・安心な農畜産物の直売や農業経営の多角化などにより、都民生活に密着した産業へと変貌してきました。

また、限られた農地を効率的に利用しており、平成17年の生産・供給力は、野菜でいえば小規模な県の人口に相当する約68万人分を供給しています。

東京産主要農畜産物の供給可能人口と自給率(平成17年)



東京都産業労働局調べ

(1) 東京ならではのバラエティー豊かな農畜産物

東京では、多様な都民ニーズを捉えた、実にバラエティー豊かな農畜産物が生産されています。都民の食卓に上る野菜や果実、畜産物などのほか、生活に彩りを添える花き、都市を緑化する植木類の生産が行われています。

① 多品目の野菜を周年生産

野菜生産では、直接消費者に販売できるメリットを最大限活かすため、新鮮さが求められるコマツナやホウレンソウの周年栽培、完熟トマトや朝採りのエダマメなど多品目の野菜が生産されています。

また、東京には、特産品となっている「コマツナ」や「東京ウド」をはじめ、「練馬大根」や「千住ネギ」、「金町コカブ」など、歴史と伝統に育まれた江戸・東京ゆかりの野菜が多くあります。



大型ハウスで栽培されるコマツナ

参考 主な野菜の作付面積（平成 17 年）

	コマツナ	512ha
	ハウレンソウ	493ha
	ダイコン	276ha
	キャベツ	274ha
	スイートコーン	231ha
	ブロッコリー	194ha
	トマト	94ha
	ウド	33ha

青果物・花き生産出荷統計（農林水産省）より

〔コラム〕 江戸・東京ゆかりの野菜

世界の大都市に発展した江戸の近郊では、人々の食料を賄うために農業が発達し、東京都となった現在まで様々な野菜が農家の手で改良され、東京各地の地名のついた品種が続々と誕生しました。

（例えば） 「滝野川ゴボウ」、「金町コカブ」、「亀戸大根」、「馬込半白キュウリ」など



東京都農業祭に並ぶ江戸・東京ゆかりの野菜

② 東京ブランドの高品質な果樹生産

果樹生産ではブドウの「高尾」やナシの「稲城」など、消費者に人気のある東京で開発された品質の高い品種が栽培され、直売が行われています。

また、熟した果実を消費者が摘みとることのできるブルーベリー農園が増加するなど、近年、果樹生産が伸びています。



都の試験場で開発されたブドウの「高尾」

参考 主な果樹の収穫量（平成 17 年）		
	ナシ	2,700t
	カキ	436t
	ブドウ	379t
	ウメ	318t
	ブルーベリー	157t




青果物・花き生産出荷統計及び特産果樹生産動態等調査（農林水産省）より

③ 高い技術の花き生産

東京では古くから、都会の生活に潤いや彩りを与える、シクラメンなどの鉢花やパンジーなどの花壇苗の生産が盛んです。花き農家は、温室等の栽培施設で新技術を導入するとともに、人を雇用するなどして企業的な経営を行っています。



出荷を迎えたシクラメン

参考 主な花きの出荷量（平成 17 年）		
	切花類	74,900 千本
	花壇苗	14,600 千鉢
	シクラメン	341 千鉢
	プリムラ類	252 千鉢

青果物・花き生産出荷統計（農林水産省）より




④ 全国有数の植木類生産

都市の多様な緑化需要に素早く対応できることから、東京は全国有数の植木類の生産地になっています。特に、屋上緑化などにも利用されるグランドカバープランツでは、生産量・額とも全国トップを誇っています。

植木畑は、樹林地に匹敵する緑地空間であるとともに、東京を緑化する植物の供給基地であり、東京の緑環境を支える存在といえます。



緑の絨毯が広がる植木畑

参考 植木類の作付面積（平成17年）		
	植木	557ha
	グランドカバープランツ	31ha
	芝	23ha

花木等生産状況調査（農林水産省）より





⑤ 東京ブランド畜産物と活発な商品開発

東京の畜産は、「TOKYO X」や「東京しゃも」など、品質に優れた東京ブランド畜産物を生産するとともに、酪農家が独自ブランドで販売する牛乳やアイスクリーム、ヨーグルトなどを直売するなど、東京独自の商品を提供しています。



TOKYO X

東京しゃも

参考 家畜の飼養頭羽数（平成17年末）		
	乳牛	2,624 頭
	肉用牛	966 頭
	豚	4,356 頭
	鶏	151,868 羽

東京ブランド家畜の出荷頭羽数 （平成17年度）		
	TOKYO X	6,999 頭
	東京しゃも	21,048 羽

東京都産業労働局調べ

(2) 新鮮で安全、安心な農畜産物を地産地消で都民に届ける

東京の農業は、生産者と消費者とのコミュニケーションが直接行える特徴があり、「新鮮」、「安全」、「安心」などの消費者ニーズに積極的に対応した生産・販売が行われています。

① 地産地消の意義

都内産の農産物の多くは、地場流通によりできるだけ新鮮な状態で直売所や近隣のスーパーを通じて、都民の食卓に上っています。最近では、食育の観点から、地元の学校給食などにも多く提供されています。

「練馬大根」や五日市の「のらぼう菜」など、市場流通していない、地域ならではの農産物も生産されており、地産地消が地域の食文化の伝承や食の豊かさを広げることに貢献しています。

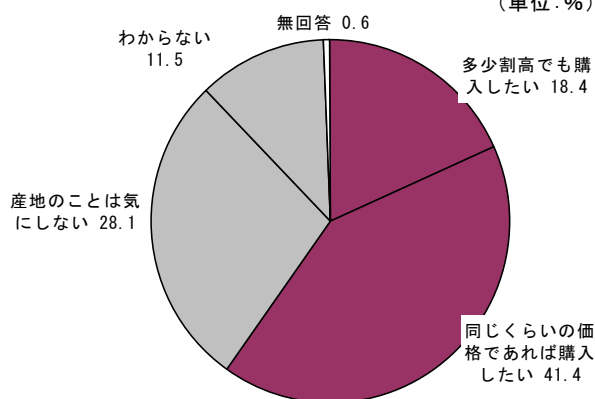
また、こうした地産地消の取組は、食料の輸送に伴うCO₂の排出量削減にもつながり、「フードマイレージ」の考え方からも意義があるといえます。



スーパーの地場産農産物直売コーナー

地元や東京の産物の購入意識

問 地元や東京の産物とわかる食品を購入したいと思いませんか
(単位：%)



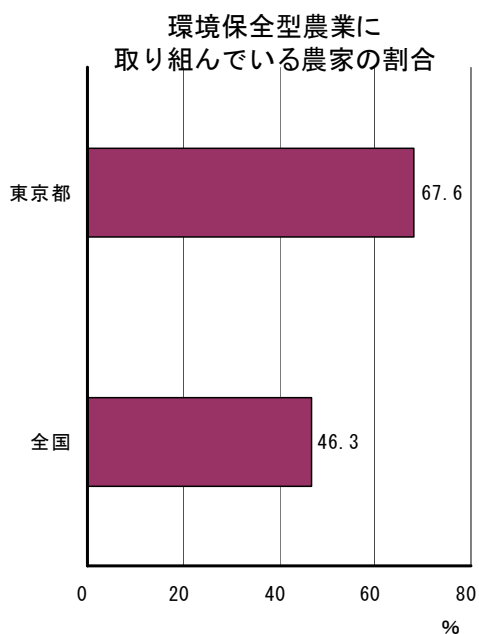
平成19年度に都が実施した「食生活と食育に関する世論調査」(生活文化スポーツ局 平成19年9月)によると、地元や東京の産物の購入意識について、「多少割高でも購入したい」が18%、「同じくらいの価格であれば購入したい」が41%で、この2つを合わせた「購入したい」が60%となっています。

② 農畜産物の安全性や環境を重視した農業生産

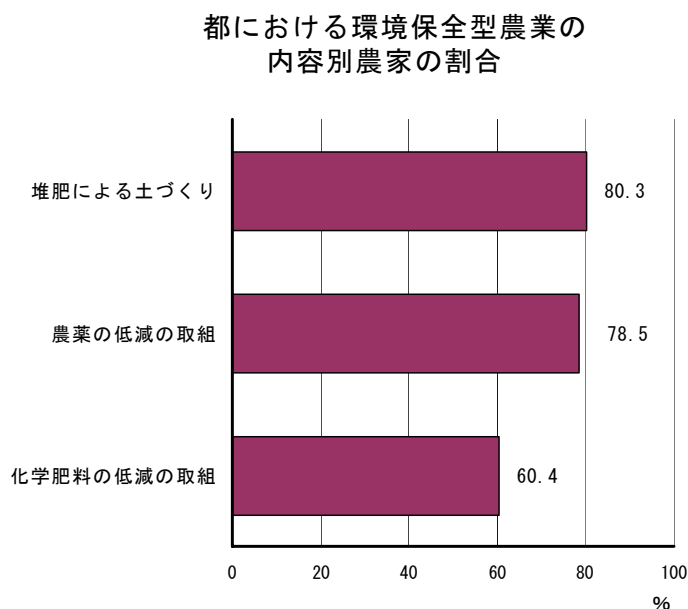
東京の農業は、消費者の目の前で生産活動が行われていることから、農畜産物の安全・安心の確保や環境への負荷軽減を重視した取組を、直接消費者に確認してもらうことができます。

安全性の高い農畜産物を提供するため、野菜などの生産では、農薬や化学肥料の使用をできる限り抑えたり、畜産物では、適切な飼養衛生管理により家畜の健康保持に努めています。

また、東京では、農薬や化学肥料の使用を控えた環境保全型農業に取り組んでいる農家の割合が、全国と比較して非常に高くなっています。



2005年農林業センサスより



2005年農林業センサスより



店頭に並ぶ特別栽培農産物
(都特別栽培農産物認証制度)



黄色蛍光灯による害虫防除
(練馬区)

2 都市農業・農地の持つ多面的機能

東京の都市農業は、住宅地の中で行われていることから、特色ある多面的な機能を持っています。

農業経営では、都民の多様なニーズに積極的に対応してきた結果、農業生産だけでなく、農業者の個性を活かした観光農園や農業体験農園の開設など、サービス業化が進んでいます。

また、都市農地は、市街地が極めて広域に広がる都市の中にあって、オープンスペースや緑地として、快適な都市環境の形成に重要な役割を担っています。しかし、こうした農地が一度宅地化されると再び農地に戻ることはないため、積極的な保全が求められています。



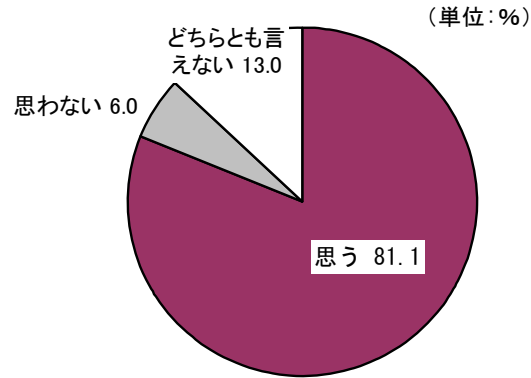
大勢の地域住民で賑わうブドウの観光農園（世田谷区）



農業体験農園は都会の新たなコミュニティ（西東京市）

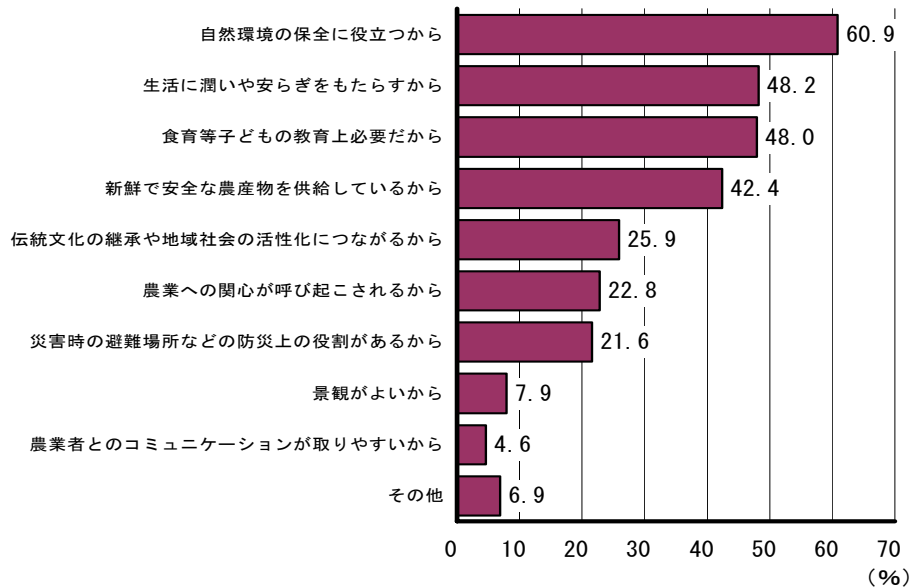
東京の農業・農地に対する意識

問 東京に農業や農地を残したいと思いますか



農業・農地を残したい理由

問 農業・農地を残したい理由を3つまで選んでください



東京の農業・農地に対する意識

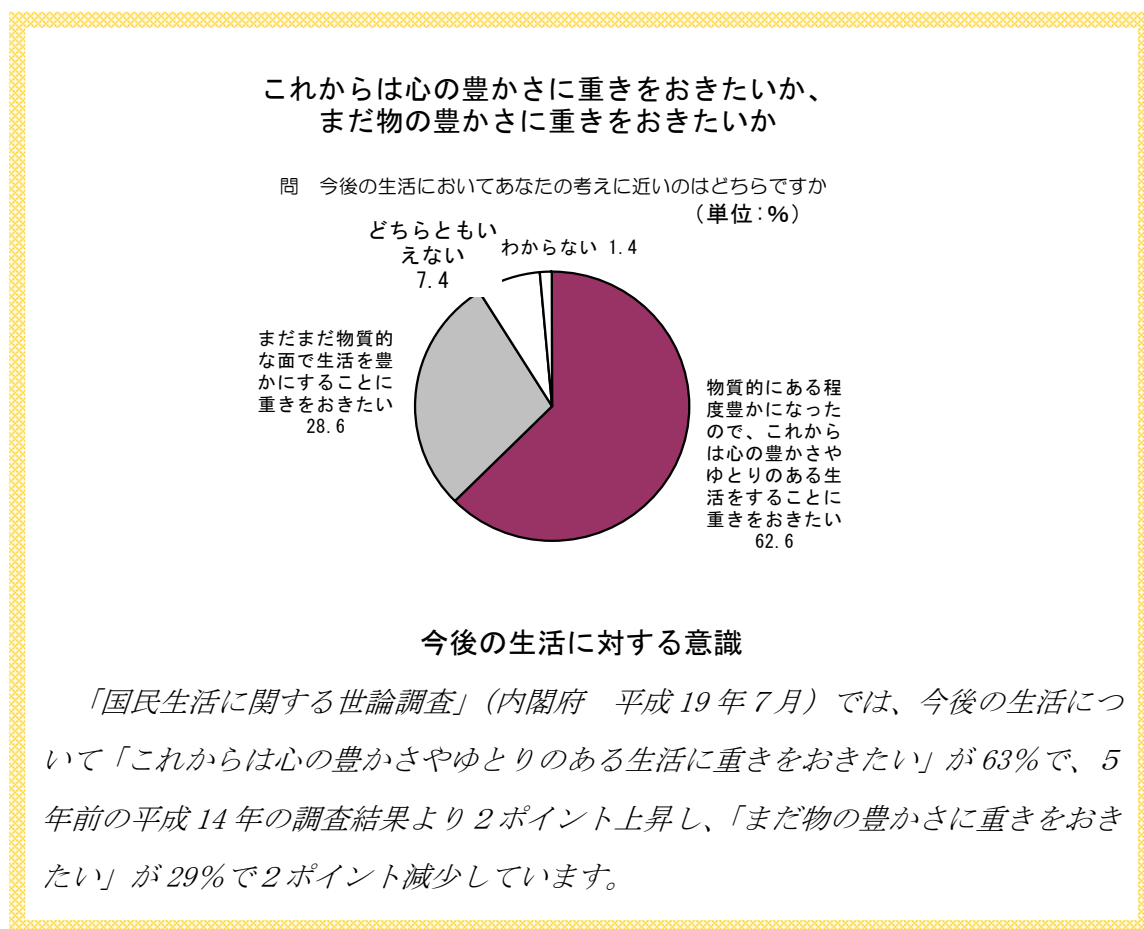
都が実施した「インターネット都政モニターアンケート・東京の農業」(生活文化局 平成17年11月)によると、「東京に農業・農地を残したいと思う」が81%で、平成5年の調査結果より15ポイント上昇し、増加傾向にあります。残したい理由については、「自然環境の保全に役立つ」、「生活に潤いや安らぎをもたらす」、「食育等子どもの教育上必要」、「新鮮で安全な農産物を供給」が上位を占めています。

(1) レクリエーション・コミュニティー機能

余暇を活用して農業体験をしてみたいという都民ニーズに応えるため、都市農業は、観光農園や市民農園など、身近なレクリエーションの場を提供しています。

また、近年は、農業体験農園の開設や農業ボランティアの受け入れなど、都民と農業との新たなふれあいの機会が増えてきました。

これらは、レクリエーションの場としてだけでなく、都会の中の新たなコミュニティーの場や、豊かさを実感できるライフスタイル実現の場としても活用されています。



① 観光農園

都内には、ナシやブドウ、ブルーベリー、イチゴの収穫や、花の摘みとりなどができる様々な観光農園が数多くあります。

これらの観光農園は、泊まりがけで旅行をしなくても、気軽に週末を利用して収穫体験ができる都民の身近なレクリエーションの場になっています。

こうした観光農園は、都内に125か所あり、利用者数は年間約79,000人に上ります。(2005年農林業センサス)

② 市民農園・農業体験農園

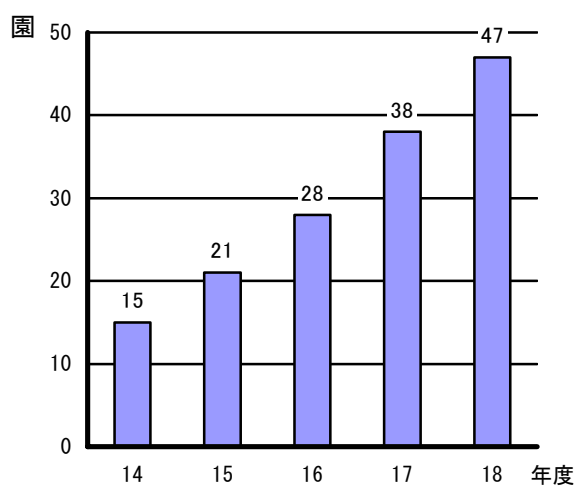
市民農園は、区市町村や農業協同組合などが設置しており、36の区市町村で、447農園、30,463区画、71ha（平成19年3月）が開設され、都民のレクリエーションの場になっています。

最近は、利用者が農家の栽培技術指導のもとに、農作業体験ができる農業体験農園が人気です。農業経営の中にサービス業を取り入れた農業体験農園は、まさに、農業のカルチャースクールといえ、都内に、47農園、2,887区画、11ha（平成19年3月）が開設されており増加傾向にあります。

1世帯が1区画を利用した場合、市民農園は約3万世帯が、農業体験農園は約3千世帯が利用していることになります。

また、農業体験農園は、農家や利用者同士がイベントを開催するなど、新たなコミュニティーの場となっており、都市農業ならではの新たな機能といえます。

都における農業体験農園数の推移



東京都産業労働局調べ

③ 援農ボランティア

農業者の高齢化や農業後継者不足が進行する一方、農業を志向する都民が増えています。このため、労働力の不足する農家に対して、農家と都民との相互理解のもとに、都民が農作業を手伝う援農ボランティア制度が、各地域で定着しつつあります。

（財）東京都農林水産振興財団では、毎年、援農ボランティアを養成、認定しており、現在、都内で約1,500人が認定されています。（平成19年3月）

(2) 教育機能

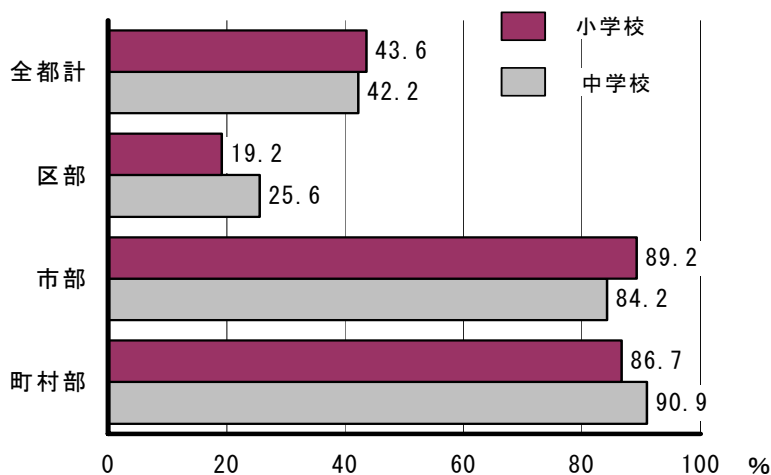
都民が心身を健康に保ち、豊かな人間性を育むためには、健全な食生活を実践し自然とふれあうことが重要です。東京の農業・農地は、自然が少ない東京の都市部にあつて、特に子どもたちが農作物の生育を通して、自然の仕組みや営みを学ぶフィールドを提供しています。

また、都では現在、様々な経験を通じて食に関する知識と食を選択する力を習得し、健全な食生活を実践できる人を育てる食育を推進していますが、農業体験は、地元の農業や食べ物の生産について学ぶ食育の場となっています。

① 農業体験学習の場

小中学校では、地域の農家の協力のもと、農業体験学習や地場産の農産物を学校給食で利用する取組などを行っています。自ら野菜などを育て、収穫したものを給食で食べることにより、子どもたちの食べ物を大切にする心が養われ、好き嫌いがなくなるなどの効果が現れています。

地場産物を学校給食で使用している学校の割合（平成 18 年度）



東京都における学校給食の実態（東京都教育庁）より

② 都民が農業への理解を深める場

近年、食料の生産現場と消費者の距離が非常に遠くなっている中で、東京の都市農業は、消費者の目の前で様々な農畜産物の生産を行っていることから、まさに、日本の農業のショーウィンドウの役割を果たしています。

また、農業体験農園や援農ボランティアへの参加など、都民と農業とのふれあいを通じて都民が農業を学び、ひいてはわが国の食料自給率や食の安全性などに対し、理解を深める場ともなっています。

(3) 防災機能

東京の都市農地は、巨大な都市の中にある貴重なオープンスペースであり、地震や火災などの災害時には、避難場所や仮設住宅の建設地などとしての活用が期待されます。

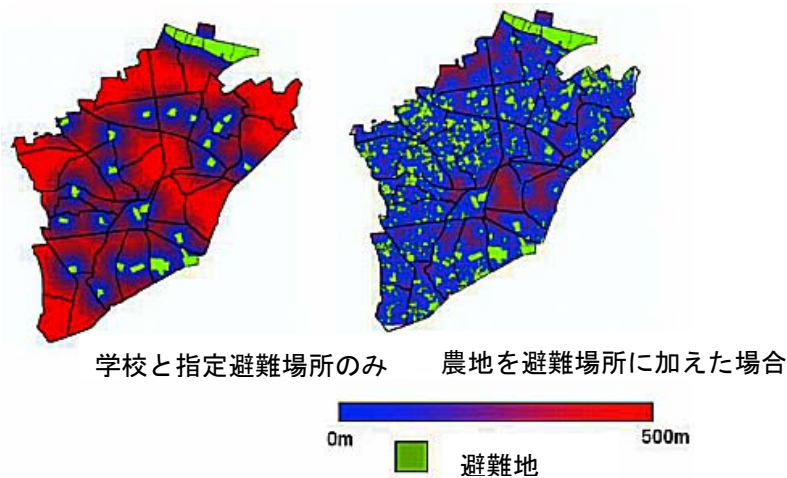
また、東京では、近年、局地的な集中豪雨による浸水被害などが発生していますが、都市農地はこうした被害を抑制する機能を持っています。

① 災害時の避難場所・延焼遮断などの機能

大規模な災害に備え、身近な都市農地を、緊急避難場所などとして利用できるようにしておくことは、住民に大きな安心感を与えます。

また、都市農地は、火災の延焼を遮断する緑地空間や災害時の食料供給の場としても期待されています。

近年、災害に強いまちづくりの観点から、農業者の協力のもとに、災害時の農地の活用に関する協定を農業協同組合などと結ぶ自治体が増えています。



練馬区大泉地区における避難地までの距離

② 洪水防止機能

東京では、近年、ヒートアイランド現象との関連も指摘されている局地的な集中豪雨が頻発し、大量の雨水があふれ出る都市型水害が発生しています。

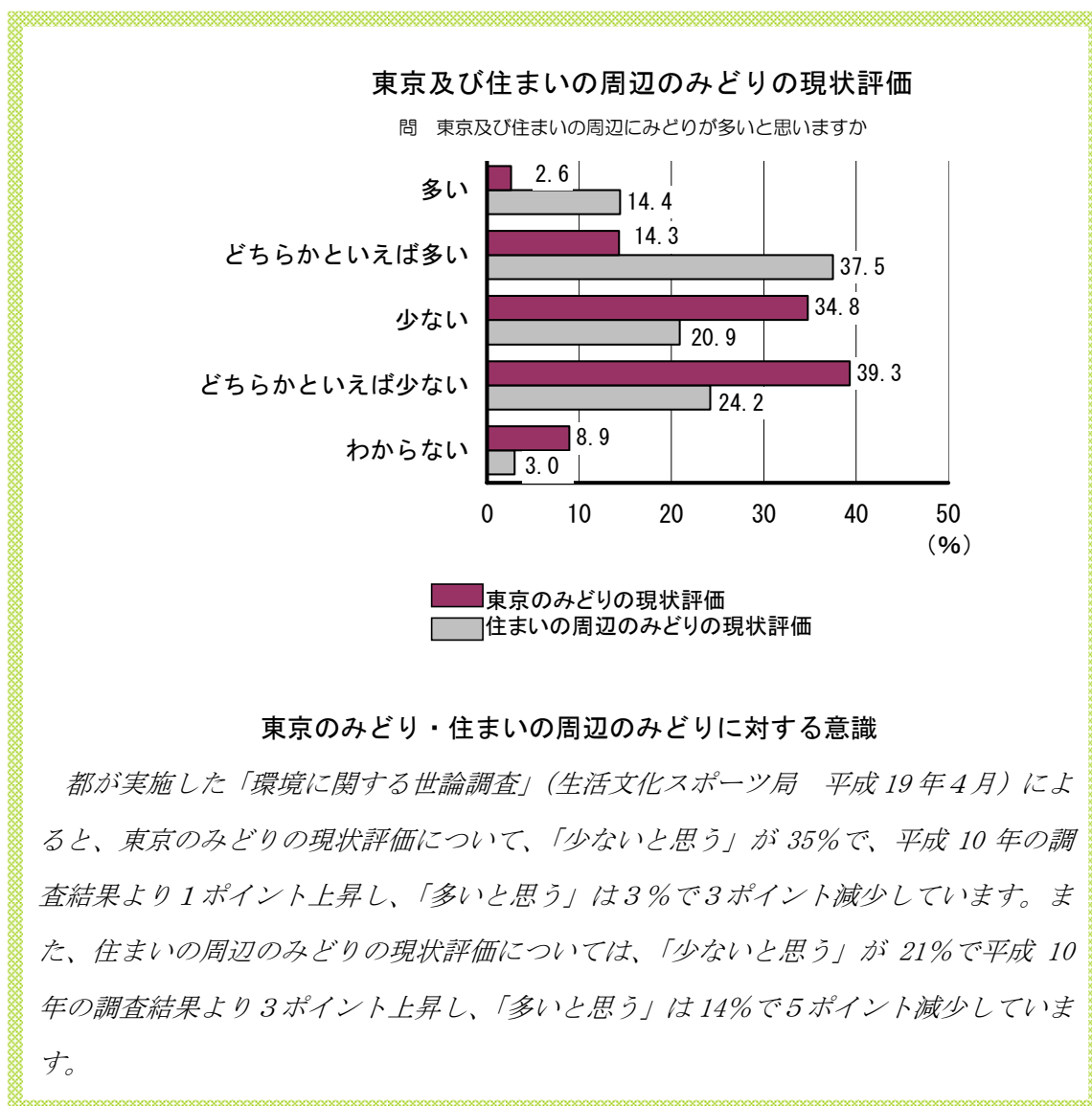
その原因として、都市化の進展により、地表面がアスファルトなどで覆われ、土壌の雨水の保水性や浸透性が著しく低下していることがあげられます。

こうした中、都市農地は、雨水の一時貯留や地下浸透の機能をもつ自然のダムとして、洪水を防止・抑制する役割を果たしています。

(4) 環境保全機能

東京は、都市機能が高度に集積する都市となりましたが、都市化の進展に伴い緑地が年々減少し、ヒートアイランド現象などの様々な環境問題も発生しており、その改善は東京の重要な課題となっています。

このような中、農地は都市の貴重な緑地として、都市環境の維持に重要な役割を果たしています。



① ヒートアイランド現象の緩和

東京では都心部を中心に、アスファルトによる地表面の被覆や、建物・自動車からの排熱などが原因と考えられるヒートアイランド現象が問題になっています。

都市農地は、農地からの水分の蒸発や植物体からの蒸散作用により気温を低下させ、ヒートアイランド現象を緩和する機能を持っています。

② 地下水の涵養

都市化に伴う雨水の不浸透域の増加により、市街地に降った雨の多くが、下水道や都市河川に流れ込むことなどを原因として、地下水位の低下や湧水の枯渇などを引き起こしています。

都市農地は、雨水を地下に浸透させ、地下水を涵養することにより、湧水の保全や中小河川の流量確保などの役割を果たしています。

③ 資源循環

元来、農業は資源循環型の産業であり、都市から大量に排出される生ゴミや街路樹・公園等の剪定枝、都内畜産農家から排出される家畜ふんなどを優良な堆肥に変え、畑に還元して土づくりに活用することで、品質の良い農産物を生産しています。

都市農地は、廃棄物として処分される未利用資源を有効活用して、農産物を生産する場となるなど、地域における資源循環に寄与しています。

(5) 景観形成、歴史・文化の伝承機能

ビルや住宅が立ち並ぶ市街地に住む人々に対して、緑豊かな都市農地は、潤いとやすらぎを与える田園風景を提供しています。

また、江戸時代の農村の面影を今に残している農家の屋敷林や蔵の風景、街道沿いに開拓された短冊状の畑地、農業にまつわる史跡や行事などは、歴史や文化の薫る都市の形成に重要な要素となっています。

〔コラム〕

玉川上水と武蔵野の農地開拓

江戸の発展に伴い、人々に飲料水を供給するため、承応2年(1653年)、多摩川の羽村から四谷まで43kmに及ぶ玉川上水が開削されました。その後、周辺地域では、これにより生活用水が確保され、人々が暮らせるようになりました。

享保7年(1722年)、徳川八代将軍吉宗の享保の改革により、武蔵野台地でも農地開発が進められることになりました。武蔵野台地の畑の多くがこの時にできたもので、現在も青梅街道や五日市街道から細長く奥に伸びた短冊状の畑は、当時の面影をとどめています。



屋敷林（調布市）

第3章 農業・農地を活かしたまちづくりの方向

東京の都市農業は、都市化の中で、多様な都民ニーズに積極的に対応するため、農業者が様々な創意工夫を凝らし、東京ならではの経営展開に努めてきました。

その結果、今、都内の各地域で、都市と調和しながら、豊かな都民生活に積極的に貢献していこうとする、新たな都市農業の芽生えが見られます。

これらの中には、今後の東京の都市農業の方向を示す大変意義のある取組が見られます。

今後、各地域で、都市農業・農地が都民生活やまちづくりに積極的に貢献していく上で、こうした事例が参考になると考えます。

ここでは、第2章の「東京における都市農業・農地の果たす役割」を踏まえ、農業・農地の持つ様々な機能をまちづくりに活かしていく8つの方向と、都内の優良事例を示します。

農業・農地を活かしたまちづくりの方向

★農業生産

1 都民に安全でバラエティー豊かな農畜産物を提供する

- (1) 消費者の目の前で安全・安心な農畜産物を生産する
- (2) 東京オリジナルの美味しい農畜産物を提供する
- (3) 東京の緑化を多彩な東京産緑化植物が支える
- (4) 農産物直売所を地域活性化の拠点とする

2 様々な地場産業と連携して地域を活性化する

- (5) 農業と商工業が連携して新商品を開発する
- (6) 素材にこだわり個性豊かな商品を提供する

★レクリエーション コミュニティ

3 身近で楽しめるレクリエーションの場を提供する

- (7) 観光農園でお客様が満足できるサービスを提供する
- (8) 住宅地の中の美しい農園が生活に潤いを与える
- (9) 畑を見て散策して楽しめる空間として演出する

4 都会の中の新たなコミュニティを創出する

- (10) 畑を核とした地域コミュニティを創出する
- (11) 都会のライフスタイルに農業を取り入れる
- (12) 地域住民と農家で資源循環のまちづくりを推進する

★教育

5 農業を通じて健康で豊かな心身を育む

- (13) 子どもたちの農業体験学習を推進する
- (14) 家畜とのふれあいで「命」や「食」を学ぶ
- (15) 農業参画を望む都民に実践的な研修を行う
- (16) 農家で学んだ技術を学校教育に活かす

★防災

6 都民が安全で安心できるまちづくりに寄与する

- (17) 災害時の身近なオープンスペースとして農地を指定する
- (18) 災害時に農業用施設を活用する仕組みをつくる

★景観・歴史文化

7 都会の中に潤いや安らぎのある景観を提供する

- (19) 農家・都民・企業が協働して美しい農業景観をつくる
- (20) 地域ぐるみで里山や農業用水路を保全する

8 地域の農の歴史・文化を大切に引き継ぐ

- (21) 農の資源を活用して地域の歴史・文化とふれあう
- (22) 地域の人たちが農の歴史・文化を守り伝える

1 都民に安全でバラエティー豊かな農畜産物を提供する

大消費地に近接して行われている東京の都市農業は、食の安全に対する消費者ニーズに積極的に応えていく必要があります。

このため、農業者は、農薬の使用をできるだけ抑えたり、家畜の適切な飼養衛生管理に努めるなど、安全性の高い農畜産物を生産するとともに、生産に関する情報を消費者に積極的に公開していくことが重要です。

また、東京には、ナシの「稲城」やブドウの「高尾」、豚の「TOKYO X」を始めとした、東京オリジナルの美味しい農畜産物や、生活に潤いを与える鉢花・花壇苗の生産、屋上・壁面緑化など東京の緑化需要に応える緑化植物の生産などが活発に行われています。こうした東京らしい、都民に喜ばれるバラエティー豊かな農畜産物を提供していくことが大切です。

さらに、農業協同組合などが開設し、地産地消の拠点となっている農産物直売所では、地域の農業情報を積極的に発信しながら、都民と地域農業の交流の拠点、地域活性化の拠点へと発展させていく必要があります。

1 都民に安全でバラエティー豊かな農畜産物を提供する

(1)消費者の目の前で安全・安心な農畜産物を生産する

東京の都市農業は、安全な農畜産物の生産を消費者の目の前で行っています。今後も農業者は、新技術の導入により農薬だけに頼らない栽培管理や、家畜の適切な飼養衛生管理に努めるなど、安全性の高い農畜産物を生産するとともに、生産に関する情報を積極的に公開し、消費者の安心確保に努めていく必要があります。

《事例》新技術を開発・導入して安全な農産物を生産

清瀬市の「きよせ施設園芸研究会」は、農業協同組合等と協力して開発した独自構造のパイプハウスを都の補助事業で導入しました。

このハウスは、サイドや開口部が防虫ネットになっており、軒が高く作業がし易い仕様になっています。害虫が入りづらいため農薬散布の回数が軽減され、減農薬栽培やIPM技術にも対応できるようになり、農産物の安全・安心を求める消費者のニーズに一層応えられるようになりました。

現在、多くの研究会会員が環境に配慮した農業に取り組む「エコファーマー」の認定を受けて、ホウレンソウ・ミズナ・コマツナ等多くの野菜を市場に出荷しています。「安全・安心な清瀬野菜」のブランド力の強化を図りながら、環境にやさしい農業を推進しています。



【農薬散布軽減型パイプハウス】



【ダイコンの減農薬栽培】

〔事例が発揮している機能〕

都民ニーズ に応える 農業生産	レクリエーション コミュニティー	教育	防災	景観形成 歴史・文化 の伝承
★★			★	

※ ★★：積極的に機能を引き出しているもの

★：機能を引き出しているもの、または、農業・農地の本来の機能として持っているもの

1 都民に安全でバラエティー豊かな農畜産物を提供する

(2) 東京オリジナルの美味しい農畜産物を提供する

東京には、農作物ではウドの「都香」やナシの「稲城」、ブドウの「高尾」、畜産では豚の「TOKYO X」や鶏の「東京しゃも」など、全国にも誇れる品質に優れた農畜産物があります。東京の農業は、こうした東京オリジナルの美味しい農畜産物の生産に努め、都民の食卓に提供していくことが大切です。

《事例》 多角的な販売戦略で果樹の里づくり

江戸時代の元禄年間からナシの栽培が行われていたJA東京みなみ管内では、住宅地が混在する農地で「地域ブランド」である、大玉でみずみずしい食感のナシの「稲城」や、種なしで酸味が少なく糖度が高いブドウの「高尾」などが生産されています。

大消費地東京だからこそ、旬の短い「稲城」や希少性の高い「高尾」が高級で魅力的な商品になっています。沿線の鉄道会社やデパート、郵便局、プロ野球球団等と連携して広報・販売活動を展開するとともに、地元の大学や商工会・酒販組合と協力し、洋菓子やワイン等の商品開発も行ってきました。さらに、生産者団体が小中学校の給食や総合学習を支援するなど、時代の変化や需要に柔軟に対応しながら、地域住民や自治体等と一体となって果樹の里づくりを推進しています。



【ナシの袋かけの体験学習】



【出荷検討会で品質チェック】

〔事例が発揮している機能〕

都民ニーズ に応える 農業生産	レクリエーション コミュニティー	教 育	防 災	景観形成 歴史・文化 の伝承
★★	★	★		★

1 都民に安全でバラエティー豊かな農畜産物を提供する

(3) 東京の緑化を多彩な東京産緑化植物が支える

都市化が進んだ東京では、屋上・壁面緑化や狭い道路における街路樹の植栽など、東京特有の緑化需要があります。このため、地元東京産の緑化植物の供給を増やし、さらに様々な都市空間を緑化する技術開発や、都市を美しく彩る新たな樹種の提案などを積極的に行い、東京の緑化を東京産緑化植物が支えていく必要があります。

《事例》 新たな緑化素材「東京花マット」で都市空間を彩る

花マットは、花の苗を縦25cm×横25cm×高さ4cmの平らな容器で栽培し、マット状に成型させた新しい緑化用材料です。壁面などに簡単に固定でき、様々なスペースで四季折々の花が楽しめます。

花マットは、東京都が、国・県の研究機関や大学との共同研究（平成15～17年）により開発しました。

平成19年には、東村山市、あきる野市などの生産者の組織「東京花マット」が設立され、本格的に生産を開始しました。現在は、イベントでの使用が中心で、受注生産を行っています。

今後は、都と生産者組織が共同で、花マットに適した品種の開発や低価格化に取り組み、屋上・壁面での活用を推進し、美しい都市空間を創造していきます。



【薄くて軽く施工が簡単】 【花マットによる空間緑化】【銀座の環境イベントでの展示】

〔事例が発揮している機能〕

都民ニーズ に応える 農業生産	レクリエーション コミュニティー	教 育	防 災	景観形成 歴史・文化 の伝承
★★				★★

1 都民に安全でバラエティー豊かな農畜産物を提供する

(4) 農産物直売所を地域活性化の拠点とする

都内の各地域には農業協同組合などが運営する農産物直売所があり、都民に採れたてで安全な地場産の農畜産物を提供する地産地消の拠点となっています。今後はさらに、加工品の開発・提供や地域農業の情報発信など、農産物直売所のサービス向上に努めながら、都民と地域農業の交流の拠点、地域活性化の拠点へと発展させることが重要です。

《事例》 都内初の「道の駅」で地域を活性化

平成 19 年 4 月、八王子市は、都内初の道の駅「八王子滝山」をオープンしました。約 1,300 m²の施設には、農産物直売所や地場産の食材を使った惣菜、アイスクリームの販売店、飲食店、地域物産コーナーなどがあり、新鮮な地場産農産物を目当てに多くのリピーターが訪れています。商品のバーコードを、施設内に設置してあるモニターに当てると、農家の顔写真や消費者に向けたメッセージを見ることができます。まさに、「生産者の顔が見える、安全・安心な農畜産物」を提供する取組が行われています。また、定期的に行われる農畜産物に関するイベントもお客様に好評です。

オープンした年の 10 月には、年度目標を大きく上回る来場者と売上がありました。産業振興及び消費者・農業者の交流の拠点として、地元農業者や市民の期待とともに、都内各地の自治体からも大きな関心が寄せられています。



【道の駅「八王子滝山」の農産物直売所】

[事例が發揮している機能]

都民ニーズ に応える 農業生産	レクリエーション コミュニティー	教育	防災	景観形成 歴史・文化 の伝承
★★	★★			

2 様々な地場産業と連携して地域を活性化する

地場産業の振興は、都内の各地域に共通した課題ですが、農業や商工業、観光業など、地域の地場産業が連携することで、その相乗効果が期待できます。

例えば、農業と商業の連携では、商店街の店舗で地場産の農畜産物を販売したり、菓子店で地場産の果実や野菜などを材料としたお菓子を開発して地元の名物にする取組などが考えられます。

また、農業と観光業との連携では、地域を訪れる観光客の土産品として地場農産物やその加工品を販売したり、観光ルートに観光農園や農産物直売所を組み入れたりすることが期待できます。

さらに、農業の中でも、畜産農家と野菜・果樹農家が連携して、新しい加工品を開発するなど、様々な取組が考えられます。

このように、各地域の農業資源を積極的に活用して、農業と様々な地場産業が連携することによって、地域を活性化させていくことが大切です。

2 様々な地場産業と連携して地域を活性化する

(5) 農業と商工業が連携して新商品を開発する

都内各地には、地元の人々から親しまれている特産農産物があります。近年は、農業者と商工業者が連携し、こうした特産農産物を活用して、ジャム、漬物、菓子などを開発する試みがなされています。今後もさらに、農業と地場産業が連携して様々な新商品を開発し、地域の活性化に取り組んでいくことが重要です。

《事例》 特産ウドを使った商品の開発で地場産業を活性化

ウドは、独特な香りと食感が素晴らしい日本原産の野菜です。立川市は「軟化ウド」では日本一の産地ですが、地元でもあまり知られていませんでした。

このような生産者の話を耳にした市内の中華料理店が、「ウドラーメン」を作ったのが商品開発の始まりでした。これを契機として、生産者、立川市、商工会議所、商店街振興組合連合会が連携・協働して、ウドを使った商品の開発が始まりました。

ウドを使った「パイ」、「どらやき」、「煎餅」、「羊羹」、「ピザ」など、次々と市の新たな特産品が誕生しました。また、ウドを食材としたオリジナルメニューを扱う店は、中華料理店、レストラン、ホテルなど、広がりを見せています。

市内の農業と商工業、サービス業等が連携して、ウドの商品開発に取り組むことで、地場産業が活性化し、伝統のウド栽培が引き継がれ、市民の郷土愛が育まれるなど、地域に大きな活力が生まれています。



【ウド室で栽培中の軟化ウド】



【ウドを使ったお菓子】

[事例が発揮している機能]

都民ニーズ に応える 農業生産	レクリエーション コミュニティー	教 育	防 災	景観形成 歴史・文化 の伝承
★★	★			★

2 様々な地場産業と連携して地域を活性化する

(6) 素材にこだわり個性豊かな商品を提供する

近年、酪農・養鶏などの畜産農家や、野菜・果樹などの栽培農家が連携し、地元の良質な素材を活かして開発・製造した、アイスクリームやプリン、ケーキなどの商品が消費者に人気です。これからも、素材にこだわった個性豊かな商品を開発・提供していくことが大切です。

《事例》 都内産の様々な農畜産物を使った アイスクリームづくり

都内の「アイス工房V」は、酪農家がしぼりたての牛乳からアイスクリームをつくるお店です。この店では、開店当初から地域の食材利用にこだわっていました。先ず取り入れたのは、自家農園のブルーベリーです。紫色のアイスクリームは、まさに地場産農産物へのこだわりの結晶です。

このほか、近隣の農家の鶏卵、エダマメ、リンゴ、ミカン、奥多摩のユズ、ワサビ、さらに海を隔てた小笠原のパッションフルーツなど、東京産の旬の素材を取り入れてアイスクリームのバリエーションを増やしています。それぞれの地域で育てた自然の風味をこのお店では居ながらにして味わえます。



【ログハウスのお洒落な売場が素敵です】



【都内にある酪農家のアイス工房はどこも人気です】

〔事例が発揮している機能〕

都民ニーズ に応える 農業生産	レクリエーション コミュニティー	教育	防災	景観形成 歴史・文化 の伝承
★★	★			

3 身近で楽しめるレクリエーションの場を提供する

東京の都市農業・農地は、都民が余暇を活用して、身近で楽しむことができるレクリエーションの場にもなっています。都内には多くの観光農園や市民農園、農業体験農園などがあり、高齢者から子どもまで、都民が自然とふれあい、農作業などを体験することができます。

近年、観光農園では、果実、野菜、花などの収穫体験に加え、農畜産物の加工体験や喫茶サービスの提供、また、美しい農園づくりに工夫を凝らす取組などが見られます。

今後も、都民の様々なニーズを取り入れながら、地域の中で美しく潤いのある空間を提供できるよう、観光農園などの充実を図っていく必要があります。

さらに、植木や花などが栽培されている農地については、都民が緑や農作物に親しみ、楽しむ空間として演出するなど、新たな取組をしていくことが大切です。

3 身近で楽しめるレクリエーションの場を提供する

(7) 観光農園でお客様が満足できるサービスを提供する

東京の観光農園は、高齢者から子どもまで、都民が身近で農業とふれあうことができるレクリエーションの場です。これからの観光農園は、果実、野菜、花などの収穫体験に加え、農産物加工やフラワーアレンジなどの多様な体験メニューや喫茶サービスの提供など、アミューズメント機能の向上に努めていくことが重要です。

《事例》 都会で高原気分！ 摘みとり農園と 喫茶ハウスで楽しさUP

都内のB農園は、ブルーベリーの摘みとり農園に、加工施設とログハウスの喫茶ハウスを併設して、平成6年に本格オープンしました。

コンセプトは、「ブルーベリーで都会のオアシスを創ろう！」です。農園には、約30品種のブルーベリーの他、ラズベリーやブラックベリー、ジュンベリー等、約10種類のベリー類が栽培されています。

喫茶ハウスでは、お客様がくつろげる空間づくりと特に女性に喜ばれるサービスを心がけ、濃厚な生ジュースや、様々なジャム、ケーキなど、農家が開発した多くの商品を提供しています。

都会の中で、収穫体験ができ、おしゃれなログハウスでくつろげ、おいしいデザートが食べられる農園として人気です。



【とてもおしゃれなログハウス】

【農園のスタッフ】

[事例が発揮している機能]

都民ニーズ に応える 農業生産	レクリエーション コミュニティー	教育	防災	景観形成 歴史・文化 の伝承
★★	★★	★		★

3 身近で楽しめるレクリエーションの場を提供する

(8) 住宅地の中の美しい農園が生活に潤いを与える

都内には園主が、お客様に楽しんでもらえるよう工夫を凝らした、花やイチゴ、ブルーベリーなどの様々な観光農園や農業体験農園があります。こうした住宅地の中の農園は、都民にレクリエーションの場を提供するだけでなく、美しい景観づくりに努め、地域の人々に憩いのオアシスを提供していくことが大切です。

《事例》 市民に憩いの場を提供する花の摘みとり農園

都内の〇農園では、人々が園内を自由に散策し、気に入った四季折々の花や果実を摘みとり、購入することができます。

100種類以上も栽培されている販売用の花には、名前や値段が一切表示されていないので、人々は花壇にいるような安らぎを覚えます。花と緑に囲まれた美しい農園には、ログハウス風の直売所や喫茶店、木製ベンチがあり、人々にゆっくりとした時間を提供してくれます。

「地域の人々の庭だと思って欲しいのです」という園主の思いが伝わってくるこの農園には、年間（4～12月の9ヶ月）2万人以上の人が訪れます。



【花畑で憩うひと時】



【農園の隅々まで花一杯、喫茶店も人気です】



〔事例が発揮している機能〕

都民ニーズ に応える 農業生産	レクリエーション コミュニティ	教 育	防 災	景観形成 歴史・文化 の伝承
★★	★★	★	★	★★

3 身近で楽しめるレクリエーションの場を提供する

(9)畑を見て散策して楽しめる空間として演出する

東京の農地には、野菜や果樹、植木、花など、実に多様な農作物が栽培されており、都民の興味をひく緑の空間になっています。

このため、植木や花などの畑を、都民が緑や農作物に親しみ、楽しめる空間として、また、学習の場などとして演出する取組を進めていくことが大切です。

《事例》 植木畑が楽しい植物園に変身！

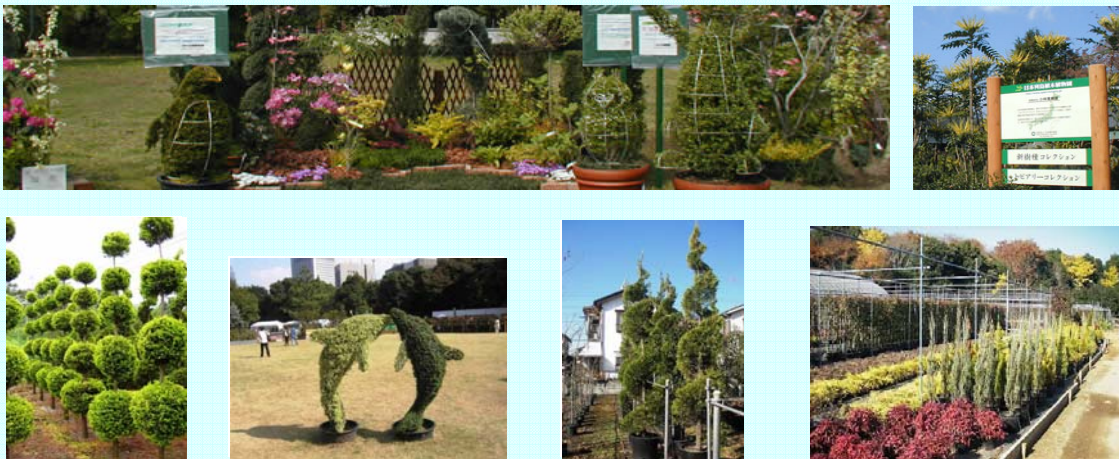
都内のK農園は、約 20,000 m²の畑に、国内外の緑化樹木や、花木、グランドカバープランツ、造形樹など、様々な種類の樹木を生産し販売しています。

また、イルカやペンギン、ウサギなどの形をした植木や、渦巻き形の植木なども生産しており、見て楽しめる植木畑です。

平成 15 年からは、約 6,600 m²の畑を植木植物園として開放し、海外からの輸入花木や広葉樹・落葉樹等、様々な樹種を栽培しています。

春から夏にかけての新緑や花、秋の木の実や紅葉など、四季折々の美しい植木畑の景観を楽しんだり、今まで知らなかった植物を発見できます。

都民の皆さんが気軽に訪れ、様々な緑化植物を見て、学んで、散策できる素敵な植木畑です。



【見ているだけで楽しくなる植木植物園】

〔事例が発揮している機能〕

都民ニーズ に応える 農業生産	レクリエーション コミュニティー	教 育	防 災	景観形成 歴史・文化 の伝承
★★	★★	★	★	★★

4 都会の中の新たなコミュニティーを創出する

近年、団塊の世代をはじめとして、豊かなライフスタイルを実現するために、農業を経験したいという都民が増えています。

都会の中で、こうした都市住民のニーズに応えているのが、農家の指導のもとに農作業ができる農業体験農園や、労働力不足の農家を手伝う援農ボランティア制度です。

これらは、単に農作業を行うだけでなく、農業を通じて、農家から専門的な農業技術などを学んだり、農家や参加者同士のコミュニティーが形成されたりしています。

今後も、農家と参加者が一緒になって工夫を凝らしながら、こうした取組をさらに発展させていくことが大切です。

また、農家と地域住民がコミュニケーションを深めることにより、都市から出る生ゴミを農家が堆肥として活用する資源循環のまちづくりなど、地域の取組も重要です。

4 都会の中の新たなコミュニティーを創出する

(10)畑を核とした地域コミュニティーを創出する

農業体験農園には様々な人が集い、園主と一緒に農作業で汗を流しています。都会の中で、本格的に農業を体験したいという都民の声に応えて誕生したのが農業体験農園ですが、園主と利用者が交流を深め、農業以外の活動にも創意工夫を重ねることにより、地域の新たなコミュニティーとして、発展させていくことが大切です。

《事例》 サービスが進化する農業体験農園

農業体験農園は、農家が経営の一環として行う、農業のカルチャースクールです。「新鮮で安心な農産物を食べたい」、「農業体験で潤いのある生活がしたい」という区民の声に応えて、平成8年に練馬区で誕生しました。練馬区では、毎年1園ずつ農園の開設を支援しており、現在13農園になります。

農業体験農園は、一般の市民農園とは異なり園主が作付け計画を作り、作業に必要な技術を講習会で伝授します。このため、初心者でも店頭に並ぶような野菜ができると大好評です。農園では、農作業を通じて「園主と利用者」、「利用者同士」の交流が大変深くなります。また、園主は、収穫祭や料理講習会、寄席や音楽会など、様々なイベントを企画し、サービス向上に向け常にチャレンジしています。

農業体験農園は、農作業や収穫の喜びのみならず、利用者にとって仲間と交流ができる、都会の新たなコミュニティーになっています。



【収穫祭や交流会は大盛況】



【園主の指導を熱心に聴く利用者】

〔事例が発揮している機能〕

都民ニーズ に応える 農業生産	レクリエーション コミュニティー	教 育	防 災	景観形成 歴史・文化 の伝承
★	★★	★★	★	

4 都会の中の新たなコミュニティを創出する

(11) 都会のライフスタイルに農業を取り入れる

豊かなライフスタイルを実現するために、農業をしたいという都民が増えています。こうした都民と労働力不足の農家の架け橋が援農ボランティア制度です。今後もこの制度を充実させ、農作業や農家とのコミュニケーションなどを通じて、農業が生活の一部となる都市生活を望む都民のニーズに応じていく必要があります。

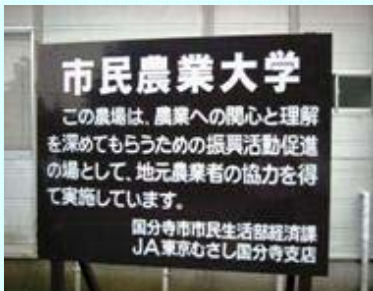
《事例》 農作業を生きがいに！ 援農ボランティア活動

国分寺市と農業協同組合が運営する市民農業大学は、農家が講師になり、市民が農業を学び体験できる手づくりの学校です。年間を通じて、種まきから収穫までの作業実習や技術講座などを行い、これまでに650人の卒業生を送り出してきました。

市民農業大学では同時に、「援農ボランティア技術習得講座・実習」を開講しています。この講座を修了した市民は、ボランティアとして市内農家の農作業の手伝いをします。直売を主体とした農業は多品目生産が求められる、多くの労働力を必要としていることから、援農ボランティアは農家に大変歓迎されています。

国分寺市の援農ボランティア制度は、「育成」と「紹介」を柱にしており、毎年、80人以上のボランティアを農家に派遣しています。

今、援農ボランティアは、農家の応援団であるとともに、都市生活の生きがいにもなっています。



【市民農業大学・農業への理解と関心を】



【苗を植付ける援農ボランティア】

〔事例が発揮している機能〕

都民ニーズ に応える 農業生産	レクリエーション コミュニティ	教育	防災	景観形成 歴史・文化 の伝承
★	★★	★★		

4 都会の中の新たなコミュニティーを創出する

(12) 地域住民と農家で資源循環のまちづくりを推進する

都市から大量に排出される生ゴミや、街路樹の剪定枝などは、農業生産にとっては貴重な有機質資源でもあります。このため、地域住民と農家が連携して、これまで廃棄物として処理されていた生ゴミ等を堆肥に変え、その堆肥で栽培された農産物を地域で消費する、環境に優しい資源循環のまちづくりを進めていく必要があります。

《事例》野菜も生ゴミも地産池消、団地と農家のリサイクルシステム

武蔵野市のS団地自治会では、各家庭から出る生ゴミを団地に設置した機械で一次処理をして堆肥化しています。それを堆肥製造業者が回収して完熟堆肥をつくり、市内の農家に配布しています。

農家では、この良質な堆肥を使用して農産物を生産しており、現在では地域における資源循環システムが出来上がりました。

平成11年度から市の支援により開始されたこの取組により、環境への配慮や資源リサイクルに対する住民の理解が深まり、新規入居世帯へも周知徹底することで、年間約200トンの生ゴミが資源化されるまでになりました。

平成14年からは、自治会、農業委員会、市の共催による「生ゴミ堆肥使用農家による朝市」が開かれ、この堆肥を利用した野菜等の販売が好評です。団地と農家の資源循環システムの取組は定着しつつあります。



【S団地に設置された生ゴミ処理機】



【朝市は大盛況】

〔事例が発揮している機能〕

都民ニーズ に応える 農業生産	レクリエーション コミュニティー	教 育	防 災	景観形成 歴史・文化 の伝承
★★	★★	★		

5 農業を通じて健康で豊かな心身を育む

都民が心身を健康に保ち、豊かな人間性を育むためには、自然とのふれあいが大切です。東京の都市農業・農地は、農作業体験を通じて、子どもたちが、自然や農業、食べ物などを学ぶ場にもなっています。

また、牛や豚、鶏などの家畜とふれあうことは、命の尊さや食を学び、豊かな子どもの心を育む上で、大変意義があります。

このため、小中学校と地域の農業者、保護者、区市、農業協同組合等が連携して、学童農園の設置や学校給食への地場産農畜産物の活用など、地域での取組を進めていくことが大切です。

また、農業に関心を持ち、本格的に農業を学びたい人に、実践的に農業を教える仕組みを作っていく必要があります。

5 農業を通じて健康で豊かな心身を育む

(13)子どもたちの農業体験学習を推進する

子どもたちの豊かな心を育み、農業に対する理解や食に対する正しい知識を深めるには、農業体験学習の取組が重要です。

このため、小中学校と地域の農業者、保護者、区市、農業協同組合等が連携して、学童農園の設置や学校給食への地場産農産物の活用などを進めていく必要があります。

《事例》「地域に見える農業」を目指して

—未来の農業応援団—

日野市の「農の応援団」は、農業者を中心とした地域ぐるみの食農教育組織です。市内の小中学生に、野菜をはじめ古代米やゴマなど、種まきから収穫までの栽培全般を体験させて、その収穫物を学校給食に供給しています。

当初2校で始めたこの取組は、地域の食農教育へと発展し、現在では市内8校に増えています。学校の栄養士や地元の大学等も活動を支えており、総合学習の時間を使って、久しく栽培が途絶えていた地元の「平山陸稲(ヒラヤマオカボ)」も復活させました。平成15年には「安心できる大豆を学校給食で使いたい」という栄養士の希望を受け、「日野産大豆プロジェクト」がスタートし、ボランティアが農作業を支えて実現しました。収穫した大豆は豆腐に加工され、市内全小中学校26校の給食に供給されています。学校給食への食材提供、子どもたちへの教育などに地域住民がボランティアとして参加しており、こうした仕組みづくりが高く評価されています。



【大豆プロジェクト】



【収穫した古代米の給食】



【農業体験風景】

[事例が発揮している機能]

都民ニーズ に応える 農業生産	レクリエーション コミュニティー	教 育	防 災	景観形成 歴史・文化 の伝承
★	★★	★★		

5 農業を通じて健康で豊かな心身を育む

(14)家畜とのふれあいで「命」や「食」を学ぶ

農畜産物の生産の場と消費の場が遠くなっている今日、都内の畜産農家で、都民が家畜とふれあえることは、命の尊さや食を学び、子どもの心を育むうえで、大変意義があります。このため、都内の畜産農家を、都民が家畜とふれあい、畜産物の加工体験ができるフィールドとして育てていくことが大切です。

《事例》 駅の近くで牧場体験

都内のI牧場は、駅のすぐそば、住宅街の中の牧場です。乳脂率が高く濃い牛乳を出すジャージー牛を飼養し、ヨーグルトやアイスクリームを製造、販売しています。

都会に近い特徴を活かし、消費者が会員の「ジャージークラブ」や子どもたちが参加する「カウボウイ・カウガールスクール」を開催し、交流活動や乳しぼり、ハム・チーズづくりなどを行っています。

また、牛の世話だけでなく、トラクターなどの農業用機械にふれたり、お米や小麦の石釜パンづくりなどの牧場体験を通じ、動物と生きる喜び、畜産の知恵や命の大切さを学びながら、農家と参加者の交流が深まっています。

この牧場では、牛舎の環境対策として食品廃棄物のコーヒー滓やカカオの殻を敷き、「コーヒーの香る牧場」と言われています。同時に完熟堆肥も販売しており、地域住民や農業者から高い評価を受けています。都市における畜産経営の新たな可能性にチャレンジしている牧場です。



【多くの参加者が集う交流活動】



【魅力的な加工品を開発】

[事例が発揮している機能]

都民ニーズ に応える 農業生産	レクリエーション コミュニティー	教 育	防 災	景観形成 歴史・文化 の伝承
★★	★★	★★		

5 農業を通じて健康で豊かな心身を育む

(15) 農業参画を望む都民に実践的な研修を行う

都民には、農業に関心を持ち、ボランティアとして農業に関わりたい人や本格的に農業を始めたい人など、農業参画を希望している人々が多数います。こうした都民を、将来の新たな農業の担い手として育成するため、実践的に農業が学べる研修を積極的に行っていく必要があります。

《事例》 都民のための「実践農業セミナー」

東京都では、新規就農者や援農ボランティアなど自ら耕作できる技術を持った人材として都民を育成するため、八王子市内の都有地、約3万5千㎡を活用して、平成18年度から、都民のための「実践農業セミナー」を開講しています。

研修期間は2年で、19年度は1期生70名、2期生50名が、1区画100㎡の研修農場を自ら耕作し、野菜の栽培方法を学んでいます。研修生は都内各地域から集まり、1期生のうち、セミナー修了後、約8割が「農園を借りて農作業をやりたい」、約3割が「本格的に農業をやりたい」と意欲的です（複数回答）。

八王子市の農業委員による指導も実施しており、研修生には、農家の長年の経験に基づくアドバイスが好評です。夏から秋には品評会や収穫祭が行われ、また、自主運営委員会により、共同作業や交流会など、様々な企画が催されています。

こうして毎年、新たな農業の担い手候補が巣立っていきます。



【小型耕運機の実習】



【キャベツの苗づくり作業】

〔事例が発揮している機能〕

都民ニーズ に応える 農業生産	レクリエーション コミュニティ	教育	防災	景観形成 歴史・文化 の伝承
	★★	★★		

5 農業を通じて健康で豊かな心身を育む

(16) 農家で学んだ技術を学校教育に活かす

子どもたちの農業体験学習や食育を進める上で、農業の技術・知識を持った人材の確保・育成が重要です。このため、農業体験農園などで、農家から農業技術を学んだ人々が、その知識と経験を活かして、小中学校における農業体験学習や食育への取組を支援していくことは意義があることです。

《事例》 都市住民が小学生の農業体験を指導

「食育基本法」の施行により、学校教育に農業体験や食育を積極的に取り入れることが期待されていますが、学校では「学童農園の不足」や「農業の指導ができる教諭の不足」といった課題があります。

東久留米市にある農業体験農園「T農業塾」では、一般市民の「塾生」が、園主の指導で身につけた栽培技術や知識を小学生に伝え、総合学習や食育などに結び付けています。

平成17年から始まったこの活動は、現在、30人の塾生が市内の小学校に赴き、種まきから収穫までの農作業指導を始め、身近にある農業の大切さを伝えています。

小学校では、収穫した野菜を給食に利用して、農産物の生産から調理にかかわった人々への感謝の心を育んでいます。このようにして東久留米市では、学校と地域農業との連携を年々深めています。



【農業体験をする小学生】



【小学校で指導する塾生】

[事例が発揮している機能]

都民ニーズ に応える 農業生産	レクリエーション コミュニティー	教育	防災	景観形成 歴史・文化 の伝承
★	★★	★★		

6 都民が安全で安心できるまちづくりに寄与する

市街化が進み、緑地空間が減少している地域では、都市農地は貴重なオープンスペースや緑地となっており、大きな災害時には、身近な避難場所などとしての役割を果たしていくことが期待されます。

また、農業生産に使用している農業用井戸は災害時の生活用水として、鉄骨ハウスなども雨を凌げる一時避難場所などとしての活用が可能です。

このため、災害時に備え、区市や農業協同組合などが、農業者の協力のもとに、農地の活用などについて協定を締結したり、農地に案内板を建てるなど、地域住民が安心できる仕組みを整えておくことが大切です。

6 都民が安全で安心できるまちづくりに寄与する

(17) 災害時の身近なオープンスペースとして農地を指定する

市街地の農地は、災害時には身近なオープンスペースとして、公園や校庭等とともに一時避難場所としての活用や、生鮮食料を供給するなどの役割が期待されています。こうした緊急時の農地の活用を円滑に行うため、農業者の協力のもと、区市や農業協同組合などにより、災害時の農地活用に関する仕組みを整備しておくことが重要です。

《事例》 農地を組み入れた国分寺市の防災システム

国分寺市では、災害時に、農地を避難場所として活用し、市民に野菜等を提供するため、市と農業協同組合の間で「災害時における農地の使用及び生鮮食料品の調達に関する協定」を結んでいます。

同市では、16の公立小中高等学校を避難場所として、10か所の公園等を広域避難場所・緊急避難場所として、44か所の農地を地区災害時退避所として、17か所の地域センター等を二次避難所として指定しています。

地区災害時退避所とは、災害時に市民が避難場所に行く際、安全を確保するために緊急に退避することができる場所で、当該農地には、看板が設置されるとともに、ホームページやマップで市民に公表しています。

また、災害により、食料の確保が困難になった場合に備え、農業協同組合は、組合員が生産した生鮮野菜等の提供に協力することとしています。



【44か所の防災協力農地を示した防災マップ】



【生産緑地と避難場所の看板】

〔事例が発揮している機能〕

都民ニーズ に応える 農業生産	レクリエーション コミュニティー	教育	防災	景観形成 歴史・文化 の伝承
★★	★		★★	

6 都民が安全で安心できるまちづくりに寄与する

(18) 災害時に農業用施設を活用する仕組みをつくる

災害時には、農業生産に使用している農業用井戸を活用して地域住民に水を供給したり、鉄骨ハウスを地域住民の一時避難場所にするなど、重要な役割が期待できます。こうした緊急時の農業用施設の活用を円滑に行うため、区市や農業協同組合は、農業者の協力のもと、協定の締結などによりその仕組みを整備していくことが大切です。

《事例》 農業用井戸や鉄骨ハウスの活用で緊急対応

J A東京スマイルでは、葛飾区及び足立区と農地の防災協定を結んでいます。

農業協同組合と足立区が初めて協定を結んだ平成 13 年は、災害時に農地を仮設住宅建設用地や復旧資材置き場として活用する内容でした。平成 19 年の見直しでは、緊急時の一時避難場所として活用するほか、ハウス等の施設の使用や農産物の供給、防災井戸、その他の施設の提供・活用が加わりました。現在 130 戸以上の農家から、農地面積で約 33 ヘクタール、鉄骨・パイプハウスが 200 棟以上、井戸が 30 戸以上、農産物提供農家が 100 戸などの協力が得られています。

また、葛飾区や足立区は、東京都の事業を活用して、農家の畑に災害時の停電に備えて発電機を併設した防災兼用井戸を設置しています。「防災井戸」には、地域住民がわかるように看板が立ててあります。



【大型ハウスでの避難訓練】



【事業で設置された防災井戸】

[事例が発揮している機能]

都民ニーズ に応える 農業生産	レクリエーション コミュニティー	教 育	防 災	景観形成 歴史・文化 の伝承
★★	★		★★	

7 都会の中に潤いや安らぎのある景観を提供する

東京では、多摩地域の多摩川流域には、田園風景を感じさせる水田があり、武蔵野台地などには畑があります。

こうした都会の中で、住宅地に近接して田畑が広がり、農産物が生産されている農業景観は、都民に潤いと安らぎを提供します。

また、農の営みにより支えられてきた里山や雑木林、農業用水路などは、地域の貴重な緑と水辺になっています。

こうした景観を、農家、都民、企業、行政などが協働した取組により、地域の財産として保全するとともに、一層美しい農業景観の創出に努めていく必要があります。

7 都会の中に潤いや安らぎのある景観を提供する

(19) 農家・都民・企業が協働して美しい農業景観をつくる

都会の中で、緑が薫り、四季折々に変化していく農業景観は、都民に潤いや安らぎを提供しています。こうした景観を地域の財産として、農家、都民、企業、行政などが協働して保全するとともに、さらなる取組により、一層美しい農業景観を創出していく必要があります。

《事例》 市民・企業参加で水田を一面のチューリップ畑に

羽村市では、市内の花き生産者グループが栽培した花壇苗を使って、農家、シルバー人材センター、町内会、児童、企業等が「花いっぱい運動」に取り組んでいます。年間4品目約12万ポットの花壇苗と約12万球のチューリップ等が駅前や街路、校庭に植えられ、市民の目を楽しませています。また、花壇コンクールではデザインや栽培管理が審査されるため、その景観は年々美しいものになっています。

さらに、市内の水田で、米の収穫後の球根づくりとして始まったチューリップ栽培は、農地の有効活用にとどまらず、関東最大級のチューリップまつりへと発展しました。現在では、市民や企業、団体の出資による「オーナー制度」が導入され、約30万球がボランティアの協力により植え付けられています。会場では花の摘みとりや野菜の直売も行われ、観光地としても賑わっています。



【農家や市民による駅前花壇への植え込み】



【チューリップまつりの会場】

〔事例が発揮している機能〕

都民ニーズ に応える 農業生産	レクリエーション コミュニティー	教育	防災	景観形成 歴史・文化 の伝承
★	★★	★	★	★★

7 都会の中に潤いや安らぎのある景観を提供する

(20) 地域ぐるみで里山や農業用水路を保全する

農の営みにより支えられてきた里山や雑木林、農業用水路などは、地域の貴重な緑と水辺であり、そこに生息する豊かな動植物を育んでいます。これらを地域の貴重な財産として、次代に引き継いでいくため、区市や地域住民などが一緒になってこれらを保全していく仕組みをつくり、快適な地域環境の維持・形成に努めていくことが大切です。

《事例》 市民による身近な水辺の維持管理・「用水守制度」

かつて東京の穀倉地帯と呼ばれた日野市には、8つの農業用水路が網の目のように流れ、その総延長は170kmにも及び、市では、水辺に生態系をよみがえらせるため、コンクリート護岸を撤去するなど、水辺の復元活動に取り組んでいます。

こうした用水路の維持管理は農業用水組合や市に加え、多くの市民が自主的に清掃を行ってきました。市では、水辺の維持管理作業を行う市民ボランティアを支えるため、平成14年度から用水守（ようすいもり）制度をスタートさせました。

この制度は、市民を「用水守」として登録し、活動中怪我をした場合などに備え、市がボランティア保険をかけるとともに、日頃活動する範囲を決めるなど、地域ぐるみで水辺を保全していくものです。

平成20年2月現在、508名が登録されています。



【農業用水路の清掃や調査活動】

〔事例が発揮している機能〕

都民ニーズ に応える 農業生産	レクリエーション コミュニティー	教 育	防 災	景観形成 歴史・文化 の伝承
	★	★	★	★★

8 地域の農の歴史・文化を大切に引き継ぐ

東京の農業は、江戸の頃に栄え、都市住民に食料を提供してきましたが、水稻の栽培などは、さらに古くから行なわれていました。

こうした歴史と伝統を持つ東京の農業においては、数百年耕され続けてきた農地や、農家の屋敷林などが、地域の歴史を物語っています。

また、各地域には、農と深い関わりを持つ史跡や、営々と伝承されてきた神事・祭事などがあります。

こうした農の歴史や文化を、農家や地域の人たちが一緒になって守り、大切に引き継いでいく必要があります。

8 地域の農の歴史・文化を大切に引き継ぐ

(21) 農の資源を活用して地域の歴史・文化とふれあう

古くから行われてきた農業、そして農地、農家の屋敷林や蔵などは、それ自体が地域の歴史・文化を物語っています。こうした地域資源を積極的に活用し、農業公園や資料館の開設、解説板の設置、絵地図の作成などの取組により、都民に地域の農の歴史や文化を伝えていくことが大切です。

《事例》地域の歴史・文化とふれあえる農業公園

練馬区の土支田農業公園は、江戸時代に建てられた納屋や古い農機具などが展示され、昔の練馬の農風景を感じることができる一味違った都市公園です。

区民を対象に農業教室が開講され、体験農場では近隣農家の指導を受け、種まきから収穫まで年間を通じた農作業が体験できます。

また、実習室では、昔の農機具を使い麦の脱穀や製粉を行ってうどんを打ったり、練馬ダイコンを沢庵漬けにするなど、収穫した農産物で加工体験ができ、練馬の農文化にふれあうことができます。

年に1回受講者を募集しており、定員は100世帯です。園内の見学、利用は自由で、年間を通じて多くの来園者で賑わっています。



【園内の施設と体験農場】

【農業教室実習風景】

[事例が発揮している機能]

都民ニーズ に応える 農業生産	レクリエーション コミュニティー	教育	防災	景観形成 歴史・文化 の伝承
	★	★★		★★

(22) 地域の人たちが農の歴史・文化を守り伝える

昔から農業は、人の暮らしに欠かせないものであり、都内各地には、農と深い関わりを持つ史跡や、営々と伝承されてきた神事・祭事などがあります。こうした有形・無形の地域の財産を、農家や地域の人たちが一緒になって守り、未来に大切に引き継いでいく必要があります。

《事例》五穀豊穡・子孫繁栄、重要無形民俗文化財の「田遊び」

板橋区に伝わる「田遊び」は、長徳元年（995年）に、水田が広がっていた徳丸原（とくまるがはら：現在の高島平一帯）に天満宮を勧請した際、「田遊び」を演じたことが始まりであると伝えられており、昭和51年に国の第1回重要無形民俗文化財に指定されました。

「田遊び」は、年の始めにあたって、五穀豊穡や子孫繁栄を祈願し、苗づくりから田植え、草取り、収穫に至る一年間の農作業を独特な仕草で演じ、神に奉納する行事で、徳丸北野神社では2月11日の夜に、赤塚諏訪神社では2月13日の夜に、それぞれの境内で行われます。

農家が主体となっている保存会によって一千年もの間、儀式がほぼ完全な形で現在に伝承されている全国的にも稀な伝統行事です。



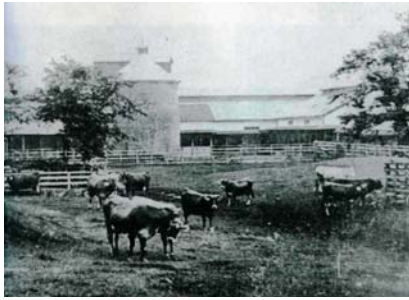
【一年の農作業を演じる「田遊び」の風景】

〔事例が発揮している機能〕

都民ニーズ に応える 農業生産	レクリエーション コミュニティー	教 育	防 災	景観形成 歴史・文化 の伝承
	★	★		★★

〔コラム〕 写真で見る昔の東京農業

東京の農業は、江戸時代から都市住民に食料を供給してきた古い歴史と伝統を持っています。かつては、東京の都心にも農地や牧場がありました。こうした昔の東京の農業の様子を写真で紹介します。



酪農創成期の牧場
(明治 32 年：巣鴨)



消費者で賑わう農家の直売所
(昭和 62 年：武蔵村山市)



家族総出でサツマイモの収穫
(昭和 14 年：小平)



田植えの風景
(昭和 20 年代：稲城)



都市化が進展、線路際の田畑
(昭和 40 年頃：大田区大森)



国民学校の学童農園
(昭和 10 年代：江戸川)

提供 東京都農業協同組合中央会

第4章 農業・農地を活かしたまちづくりのモデル

東京の都市農業は、都市化が進み農地が極めて少ない地域や比較的まとまった農地がある地域、武蔵野台地などの畑作地域や多摩川流域の水田のある地域など、地理的条件や都市開発の進み具合などにより農地の形状や栽培する作物の種類、販売方法など農業の状況は地域で実に様々です。

また、人々の農業に対する関わり方も、直売所での地場産農産物の購入、観光農園での花の摘みとりや果実のもぎとり、農作業の体験、さらには田園風景を見ながら散策を楽しむなど様々です。

第4章では、農業・農地を活かしたまちづくりのモデルを5つのタイプに類型化し、それぞれの将来像を示しました。

各地域では、これらのタイプを組み合わせるなどして、個性ある農業・農地を活かしたまちづくりを推進することが大切です。

1 地場産業連携・活性化タイプ

都市農業が力強い産業として存在するとともに、商工業や観光業などとも連携して、地場産業を活性化するタイプ

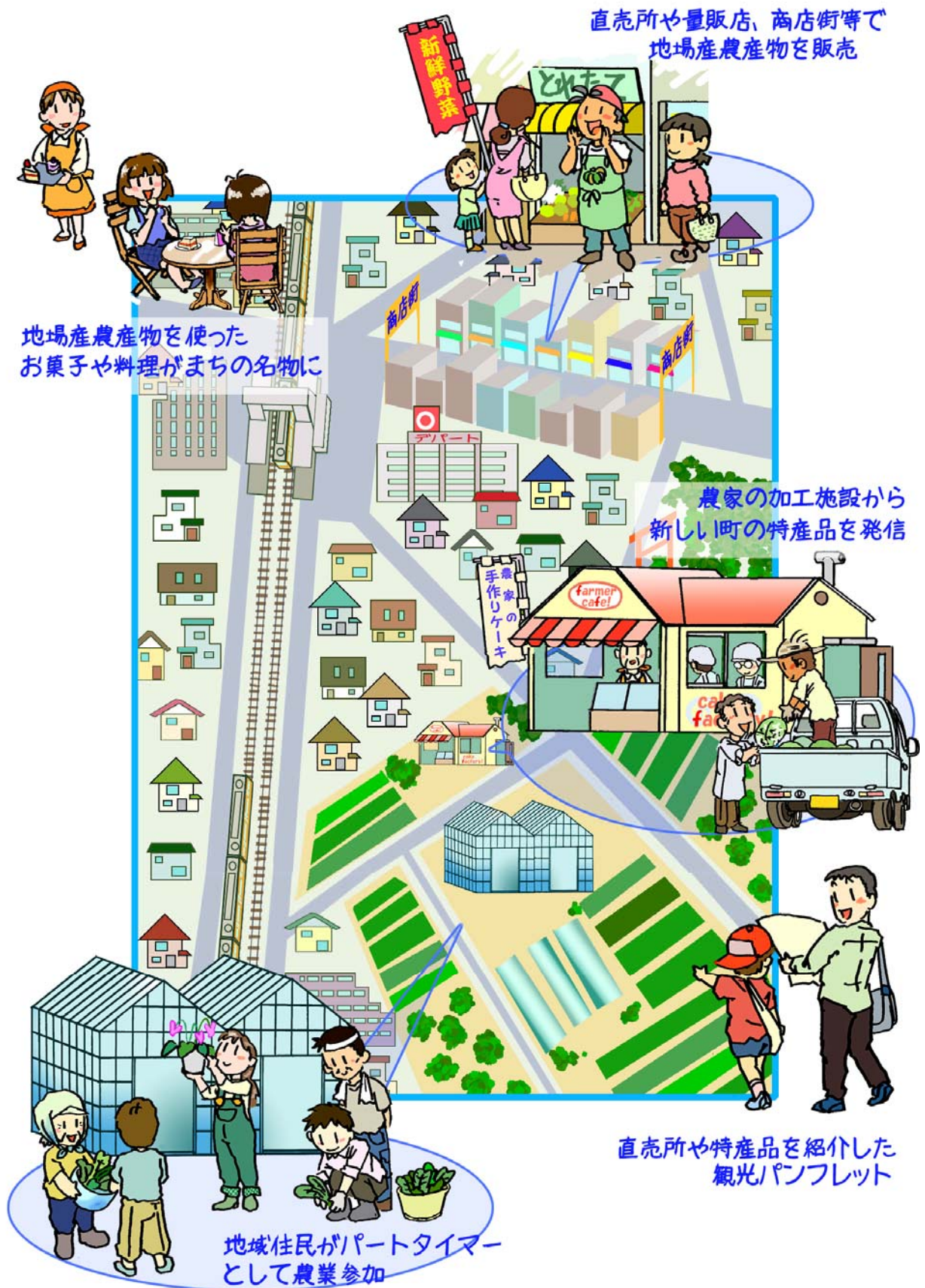
〔主な対象地域〕

商店街や量販店、観光名所などにより街が形成され、その周辺に住宅地や農地があり、野菜などを意欲的に生産販売する農家や地場産農産物を利用する商店などが共存している地域

〔まちの将来像〕

- ◇ 採れたての野菜や果実などの地場産農産物が、農産物直売所や商店街、量販店のコーナーなどで販売され、地元の消費者に喜ばれています。
- ◇ 農家の大型栽培施設の中では、農業者と一緒に、地域住民がパートタイマーとして鉢花の管理やコマツナなどの収穫作業をしています。
- ◇ 農家では、新たに加工施設をつくり、自家製のジャムや漬物、採れたて卵を材料にしたケーキなどを販売し、おいしさが口コミで広がっています。
- ◇ 地元の商店街では、菓子店で地場産農産物を利用したケーキや、飲食店で地場産野菜を素材にした料理を商品化し、まちの名物になっています。
- ◇ 観光パンフレットには、農産物直売所やみやげ用の地場産の農産加工品が紹介されています。

[イメージ図]



2 レクリエーションタイプ

**収穫体験ができる観光農園や、野菜などを販売する直売所に
地域住民をはじめ都心からも人々が訪れ、地域が賑わうタイプ**

〔主な対象地域〕

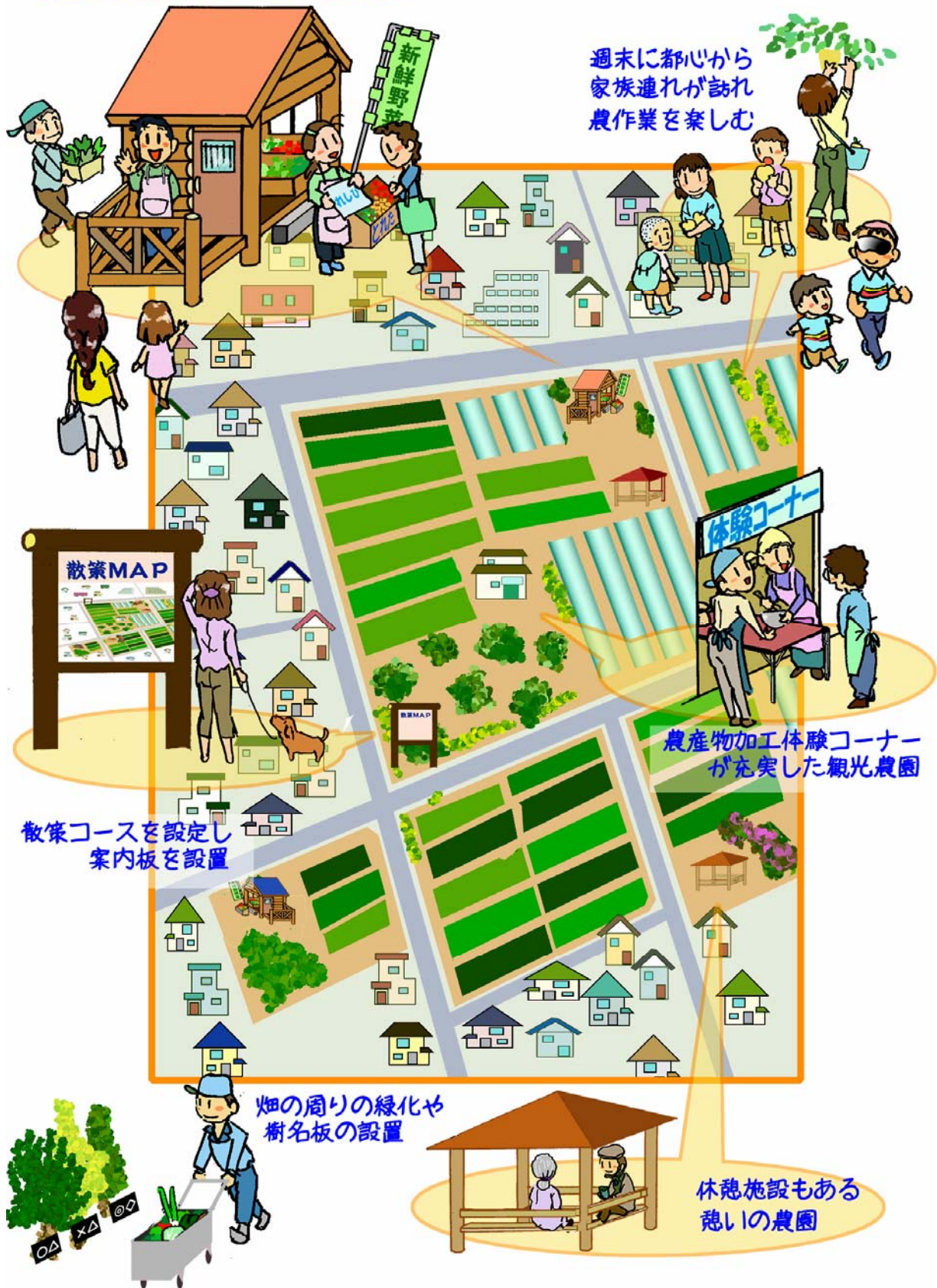
比較的農地がまとまっており、野菜や果樹、花き、植木の栽培などバリエーション豊かな農業が行われている地域

〔まちの将来像〕

- ◇ 観光農園では、農産物の加工体験ができたたり、お茶を飲みながら休憩ができたたり、お客様が一層楽しめるサービスの向上に努めています。
- ◇ 週末には、都心からも親子連れが訪れ、果実のもぎとりや花の摘みとり、農産物直売所で地場産の農産物を購入したりして楽しめます。
- ◇ 農家が、畑の周りを緑化植物や木柵で美しく演出し、開放感ある景観を作り出し、植木畑では樹名板や解説板を付け、人々が心地よく畑の周辺を散策できるようにしました。
- ◇ 農家は、おしゃれなログハウス風の直売所で、他では作っていない珍しい農産物を料理レシピなどと一緒に販売するなど、個性化が進み、魅力が増しています。
- ◇ 地元自治体が、この地域を訪れる人のために、散策コースを設定し、街角に案内板を置き、絵地図を作りました。

[イメージ図]

おしゃれで個性的な直売所で魅力UP



3 地域コミュニティ形成タイプ

農業体験農園や学童農園が開設された農地などに、人々や子どもたちが集い、農作業を通じて都会の新たなコミュニティが形成されるタイプ

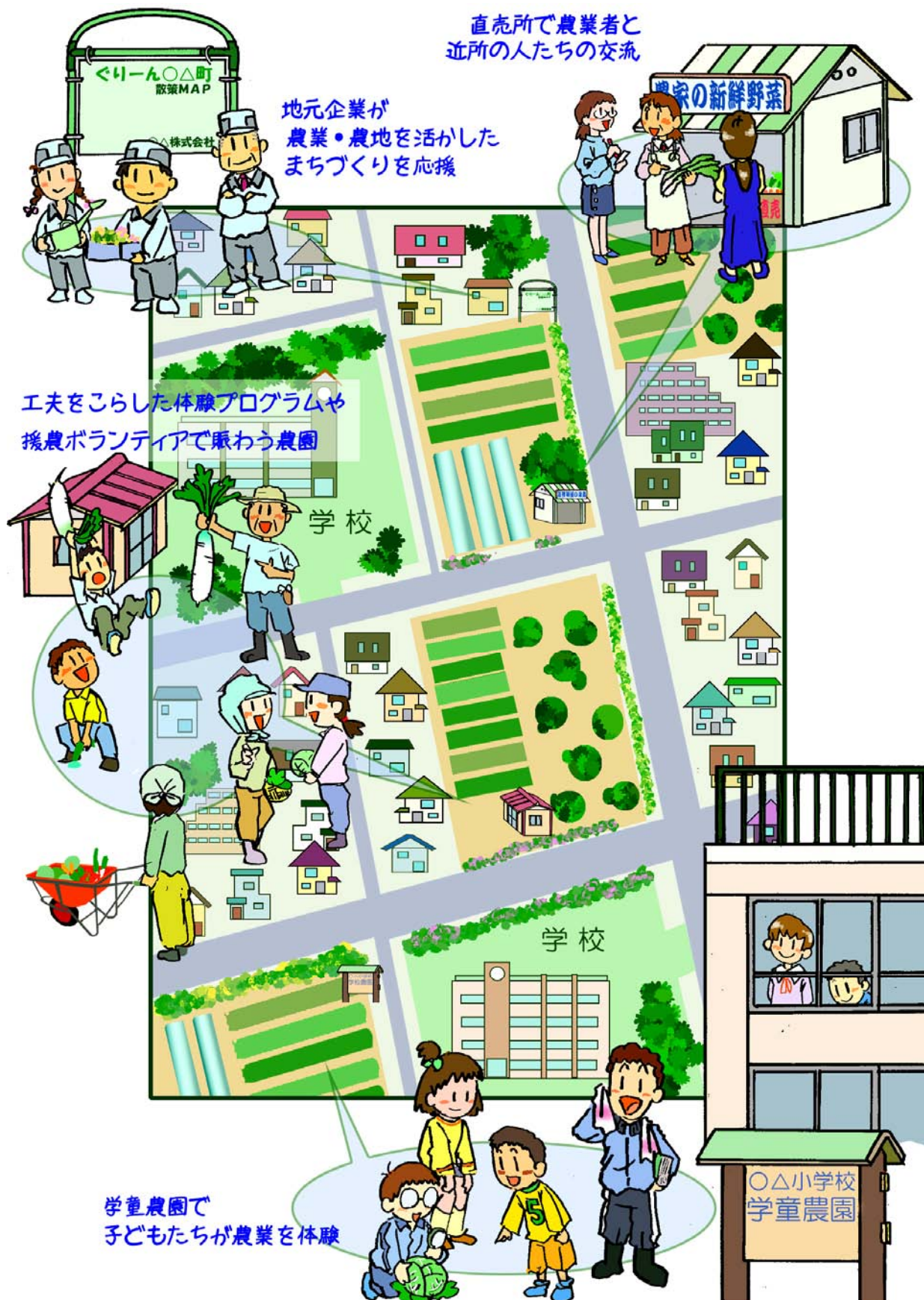
〔主な対象地域〕

住宅や学校などが多い市街地に農地が共存しており、子どもたちや高齢者を含め、様々な市民が暮らす生活の拠点となっている地域

〔まちの将来像〕

- ◇ 農業体験農園では、園主が工夫を凝らした新しいサービスに努めるとともに、利用者間のネットワークもでき、いつも賑わっています。
- ◇ 労働力が足りない農家を地域の人々が援農ボランティアとして支えています。定年退職を迎えた人々もボランティアとして農作業を手伝い、生きがいにもなっています。
- ◇ 農家は畑の一部を近所の小学校の学童農園として、子どもたちに農作業体験の場を提供しています。子どもたちは農家の話を聴き、農業の苦労や楽しさを学んでいます。
- ◇ 農家の直売所では、近所の人たちが、採れたての野菜や果物を前に、農家から、おいしい料理方法やジャムの作り方などを熱心に聴いています。
- ◇ 地元の企業も、農業・農地を活かしたまちづくりに協賛し、畑周辺への花の植栽や、絵地図や案内板づくりなどを支援しています。

[イメージ図]



4 安全・安心まちづくりタイプ

オープンスペースが少ない地域で、農地が防災拠点として、安全・安心なまちづくりに重要な役割を果たしていくタイプ

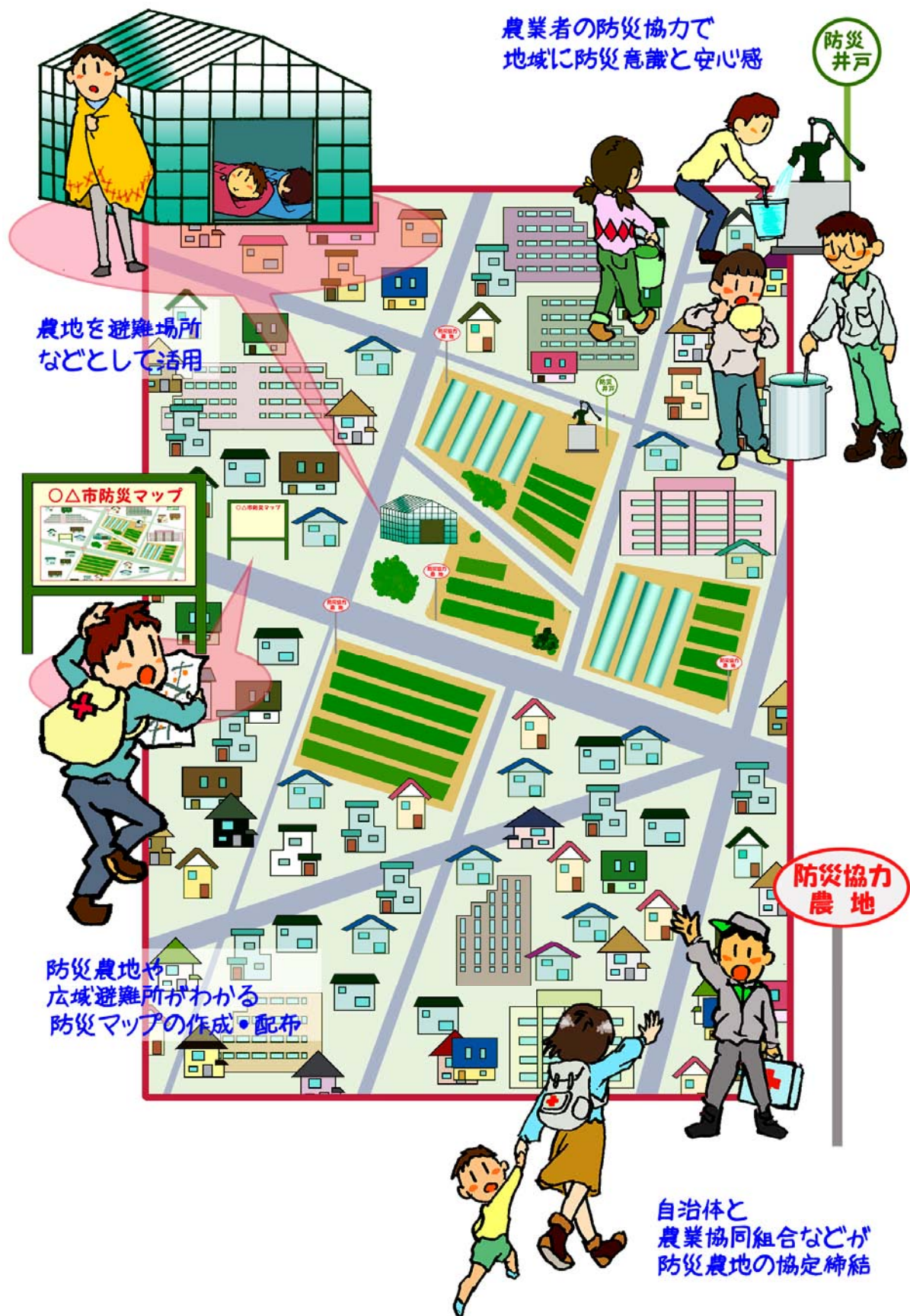
〔主な対象地域〕

住宅が建ち並び、オープンスペースや緑地空間が少なく、その中に農地が混在している地域

〔まちの将来像〕

- ◇ 農地を災害時の緊急避難場所や復旧資材置き場などとして活用できるように、農家の協力のもと、自治体と農業協同組合などが協定を締結しています。
- ◇ 協定農地には、「防災協力農地」の看板が立てられ、地域住民に大きな安心感を与えています。
- ◇ 地域の広域避難場所や防災協力農地がわかる防災マップが地域住民に配布されています。
- ◇ 自治会レベルで、防災協力農地や防災井戸の活用を含めた、防災訓練が行われています。
- ◇ 防災協力農地の取組により、地域住民の防災意識と都市農業・農地に対する理解が深まっています。
- ◇ 地域の人たちは、防災協力農地で生産された農産物を購入し、農作業を手伝ったりして、農家を応援し、農地を大切にしています。

[イメージ図]



5 美しい田園風景保全タイプ

水田や畑、雑木林が広がる地域で、人々が都会の田園風景を
味わいながら散策などが楽しめるタイプ

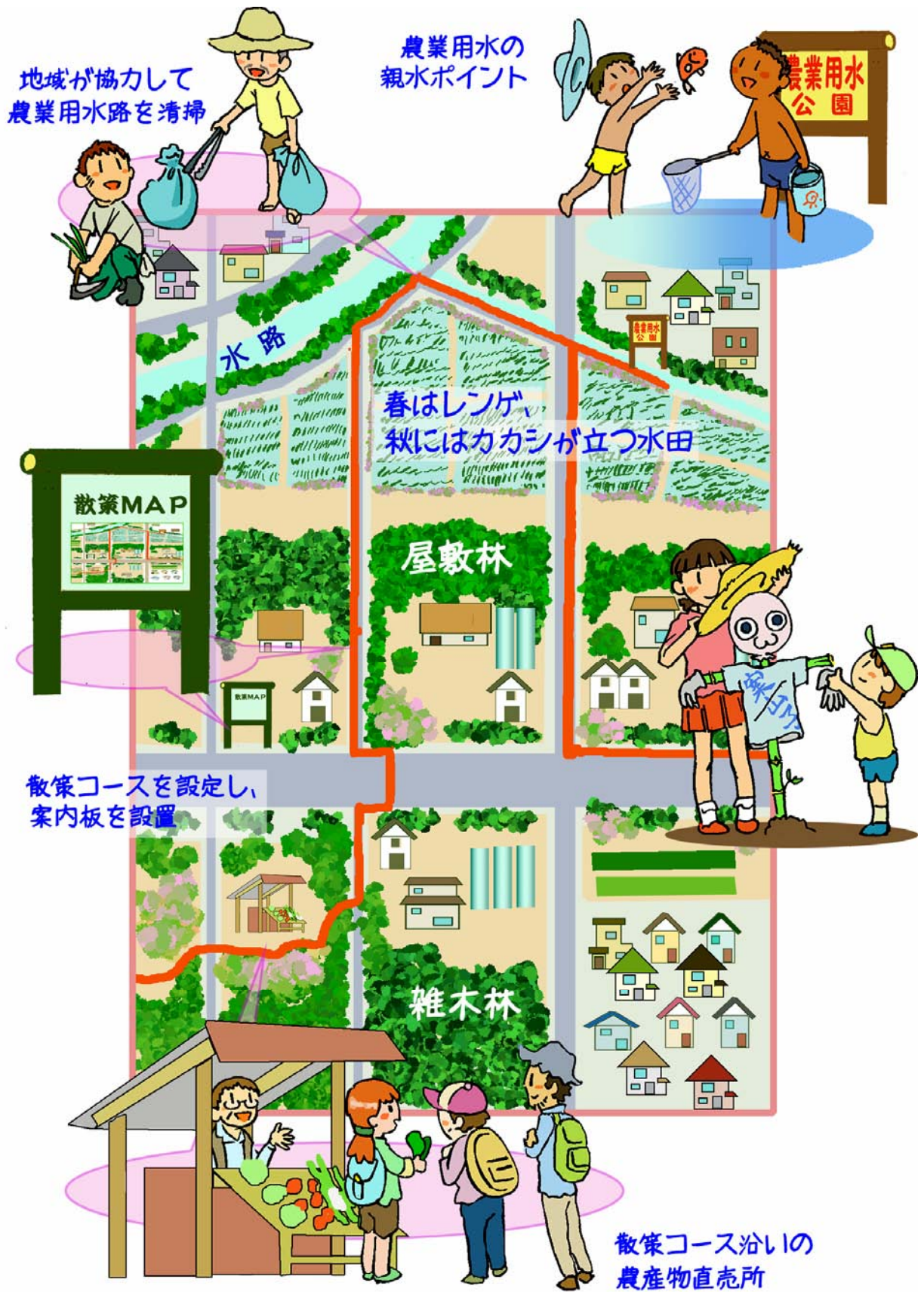
〔主な対象地域〕

現在も農業用水路が網の目のように走っている多摩川流域の水田地域や、江戸時代に農地が切り拓かれ、雑木林などとともに武蔵野の面影が今も残る畑作地域

〔まちの将来像〕

- ◇ 水田には、春先にレンゲが咲き、収穫の秋には近くの子どもたちがカカシを作り、懐かしい田園風景が見られます。
- ◇ 水田の農業用水路には、安全に配慮した親水ポイントが造られ、子どもたちが小魚や虫を採ったり、観察をしています。
- ◇ 年に数回、農家と地域住民が協力して、農業用水路の清掃作業などが行われています。
- ◇ 畑や雑木林の広がっている地域では、ハイキングのグループが、畑のそばの直売所で農産物を購入し、蔵や屋敷林のある農家の佇まいを見ながら散策をしています。
- ◇ 地元では、この地域を訪れる人のために散策コースを設定し、街角に案内板を置いたり、絵地図を作りました。また、農業にまつわる歴史・文化の解説板を設置しました。

[イメージ図]



第5章 農業・農地を活かしたまちづくりの手法

今日の東京の都市農業は、第3章の事例に見られるように、農畜産物の生産ばかりでなく、様々な面から都民生活に積極的な役割を果たしていかうとする先進的な取組が見られます。

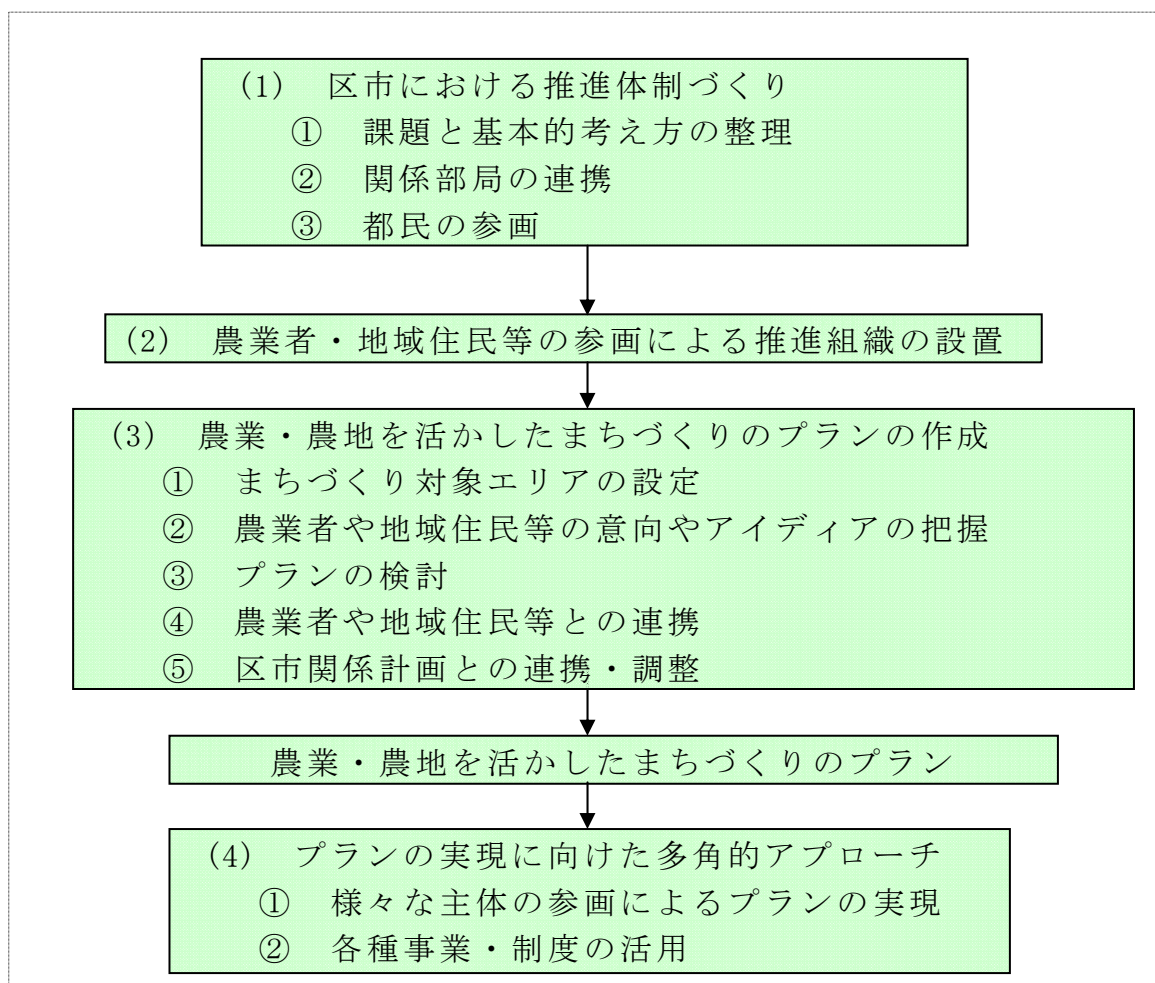
今後は、こうした取組を、都民・農業者等が参画した農業・農地を活かしたまちづくりへと発展させていく必要があります。

そのためには、地域のまちづくりを担う区や市が中心となって取り組んでいくことが重要であり、本章ではその際に参考となる、農業・農地を活かしたまちづくりの進め方について述べます。

1 区市の農業・農地を活かしたまちづくりの進め方

農業・農地を活かしたまちづくりは、各区市の実情に応じて様々な方法がありますが、ここではそのモデルとなる進め方を示します。

農業・農地を活かしたまちづくりの進め方



2 農業・農地を活かしたまちづくりへの取組

(1) 区市における推進体制づくり

① 課題と基本的考え方の整理

区市は、農業・農地を活かしたまちづくりへの取組に当たり、①農業・農地を位置づけている区市のまちづくり計画、②地域住民からの農業・農地に関する様々な要望、③農家の農地利用の意向などを踏まえ、課題と基本的考え方を整理する必要があります。

② 関係部局の連携

区市は、農業・農地の多面的機能を積極的に引き出しながらまちづくりを進める観点から、産業振興や都市計画、環境、教育などの関係部局が連携し、農業・農地を区市の関係計画に位置づけながら、総合的な推進を図る必要があります。

③ 都民の参画

農業・農地を活かしたまちづくりを進めていくには、地域で生活している都民の意見を十分に聴くなど、積極的な都民参画を求めていくことが大切です。

(2) 推進組織の設置

区市は、農業者や地域住民等と連携して取り組んでいく推進組織を設置する必要があります。

推進組織は、区市、農業者、地域住民、学識経験者、市民グループや各種団体など、地域の実情に応じて幅広い参画を求め、まちづくりの計画作りから、その実現に向けた取組まで行っていくことが大切です。

推進組織の構成員の例

区市、農業者、地域住民、学識経験者、商工・観光業者、企業、学校、市民グループ、NPO、農業団体 など

(3) 農業・農地を活かしたまちづくりのプランの作成

区市は、農業・農地を活かしたまちづくりを推進するため、推進組織における議論を踏まえ、プランを作成します。

① まちづくり対象エリアの設定

区市は、まず始めに、農業・農地を活かしたまちづくりの対象とするエリアを設定します。

地域における、農地、緑地、商店街、観光名所、小中学校などの様々なまちづくりの資源や、プランが目指す方向などを踏まえ、区市全体のエリアから、狭いエリアまで、区市の実情に応じて設定します。

対象エリアの例

- ・ 区市の全域を対象とするエリア
- ・ ○○市△△町程度の地域を対象とするエリア
- ・ ○○市△△町□□丁目程度の地域を対象とするエリア

② 農業者や地域住民等の意向やアイデアの把握

区市は、農業者や地域住民、商工・観光業者、小中学校関係者など、まちづくりの様々な主体に対して、地域が抱える課題や、今後の農業・農地を活かしたまちづくりのあり方、アイデアなどについて、アンケート調査や懇談会などで意向を把握し、プランに積極的に反映させていく必要があります。

③ プランの検討

農業者や地域住民等への意向調査結果や関係者へのヒアリングなどを参考にして、推進組織において、地域の現状分析や課題の抽出、今後取り組む方策など、プランの作成に向け検討を進めていきます。

プランは、農業・農地の持つ多面的機能を、農業振興や市民生活、まちづくりなど、様々な分野に総合的に活かしていく計画です。

プランの検討項目例

- ・ 地域におけるまちづくりの課題と基本的方向
- ・ 農業・農地を活かしたまちづくりのあり方と将来像
- ・ まちづくりにおける、農業・農地の様々な機能の活かし方
- ・ 地域の農業が共通に実現すべき農業のあり方
- ・ 農地の利用計画やその実現に向けた方策
- ・ 農業者や地域住民等の連携の仕組み

④ 農業者や地域住民等との連携

プランの作成に当たっては、農業者や地域住民等の取組を積極的に組み入れていくことが大切です。

○ 農業者・農業団体

安全・安心な農畜産物の提供や農業体験への要望など、都民の様々な声を農業経営に活かす取組

区市と農業協同組合等による災害時の農地の活用に関する協定の締結や、農産物直売所の機能を充実するなどの取組

○ 地域住民

農業者とのコミュニケーションを積極的に行い、都市農業に対する理解を深めたり、農地保全のための援農ボランティアに参加するなどの様々な取組

○ 商工・観光業者

商工・観光業者等が、地域の農業資源を積極的に活用する取組

○ 企業・NPO

企業やNPOなどが、地域の農業・農地を活かして、まちづくりに貢献する様々な取組

⑤ 区市関係計画との連携・調整

ア 区市の「農業振興計画」など、農業に関係する計画と十分な調整を行います。

○ 農業経営対策

収益性が高く、農業後継者にも魅力のある農業経営の実現に向け、多様な都民ニーズを農業経営に積極的に活かすなど、農業者の経営改善への取組

○ 担い手対策

地域の農業を担う意欲ある農業後継者や、援農ボランティアなど、多様な担い手を確保・育成する取組

○ 生産・流通対策

住民のニーズと地域の特色を活かした安全・安心な農畜産物の生産や、直売による地産池消の推進などの生産流通対策への取組

イ 区市の「都市計画マスタープラン」や「緑の基本計画」などを踏まえるとともに、都市計画などにおける様々な制度の活用について検証を行う必要があります。

○ 生産緑地地区の追加指定

生産緑地地区を追加指定して、今ある農地を積極的に保全するための取組

○ 土地区画整理事業の活用

農地の集約化や地区内道路の整備などを、土地区画整理事業で実施する取組

(土地区画整理事業は、地域で取り組む大規模なものから、数名の農家で取り組める小規模なものまで様々で、地域の実情に応じて活用が検討できます。)

○ 緑の保全に関する諸制度の活用

都民の身近に残された貴重な樹林地や農家の屋敷林等への、「特別緑地保全地区」や「保存樹・保存樹林」などの緑の保全に関する制度の活用

ウ 都市農業・農地の持つ多面的機能を一層発揮していくため、様々な分野の計画についても検討する必要があります。

○ 地域防災計画

農地を災害時における一時避難場所などとして活用する取組

○ 食育推進計画

農業体験学習の推進や学校給食における地場産農産物の活用などの取組



(4) プランの実現に向けた多角的アプローチ

① 様々な主体の参画によるプランの実現

農業・農地を活かしたまちづくりを実現するためには、プランに沿って、農業者、地域住民、商工・観光業者、市民グループなど、地域の幅広い関係者の協力と主体的な行動が不可欠です。

区市及び推進組織は、地域で活動するこれらの様々な主体を支援・コーディネートしながら、プラン実現の推進役を果たしていく必要があります。

また、推進に当たっては、推進組織と地域住民が意見交換を重ね、取組の状況をホームページに公開してパブリックコメントをもらうなど、コミュニケーションに努めながら、プランを実行することが大切です。

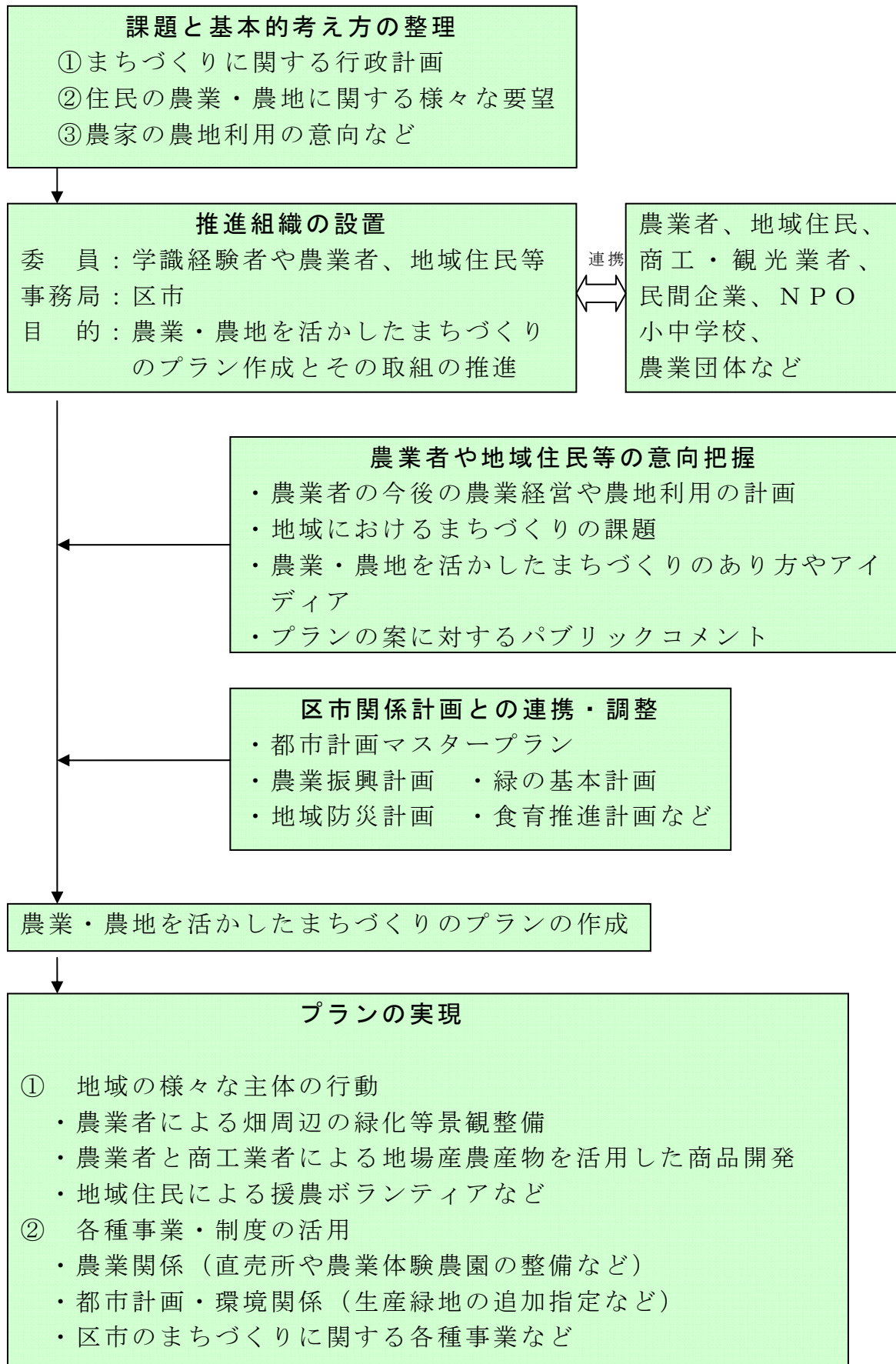
② 各種事業・制度の活用

プランの実現のためには、農業者や地域住民等の主体的な活動を基本としながら、農業振興やまちづくりなどに関連する、国や東京都、区市の様々な事業や制度の活用を検討するなど、多角的にアプローチしていくことが大切です。

各種事業・制度の活用例

- 農業関係
 - ・ 栽培施設や観光農園、直売所などを整備する農業振興事業
 - ・ 農地や農道、防災井戸などを整備する農業生産基盤整備事業
- 都市計画・環境関係
 - ・ 生産緑地地区の追加指定
 - ・ 農地の集約や道路を整備する土地区画整理事業の活用
 - ・ 特別緑地保全地区、保存樹・保存樹林の指定
- 区市のまちづくりに関する各種事業など

農業・農地を活かしたまちづくりのフローチャート例



用語解説

IPM (総合的病害虫・雑草管理 Integrated Pest Management)

病害虫の防除に関し、化学農薬のみに依存せず、天敵の利用や栽培方法など、利用可能なすべての防除技術を利用し、経済性を考慮しつつ、適切な手段を総合的に講じる防除方法のこと。



エコファーマー

持続性の高い農業生産方式の導入の促進に関する法律に基づき、土づくり技術、化学肥料使用低減技術、化学合成農薬使用低減技術を一体的に導入する計画を立て、都道府県知事の認定を受けた農業者。東京都では平成 19 年 4 月 1 日現在で 355 名を認定している。



NPO (法人) (Non Profit Organization)

営利を目的としない民間の組織や団体のこと。会費、事業収入、民間の寄付、行政の補助金などを財源にして、ボランティアの労働力などで運営を行う。特定非営利活動促進法等に基づき、法人格を取得し、銀行口座の開設、事務所を借りるなどの法律行為を法人の名で行える NPO 法人(特定非営利活動法人)と任意団体等を含む広義の NPO がある。

環境保全型農業

農業の持つ物質循環機能を活かし、生産性との調和などに留意しつつ、土づくり等を通じて化学肥料、農薬の使用等による環境負荷の軽減に配慮した持続的な農業のこと。（「環境保全型農業推進の基本的考え方」（平成 6 年 4 月農林水産省環境保全型農業推進本部））

グランドカバープランツ

地表面を覆い生育する植物の総称。茎や枝葉を伸ばして地表面や壁面などを覆い、乾燥や土の流出を防ぐ効果がある。傾斜地の法面（のりめん）や高速道路のグリーンベルト、建築物の壁面など造園や緑化資材として広く利用されている。生育が早く手入れの容易なものが適しており、アイビー、ツタ、シバザクラなど種類は増えている。

市街化区域

都市計画法に基づき、無秩序な市街化を防止し、計画的に市街化を図るため、都市計画区域を区分して、市街化区域と市街化調整区域に区域区分することをいわゆる「線引き」といい、線引きされた都市計画区域のうち、既に市街地を形成している区域及び概ね 10 年以内に優先的かつ計画的に市街化を図るべき区域をいう。東京の市街化区域は 107,734ha（平成 17 年）

地場流通

庭先売り、直売所、契約出荷、地元市場経由等、生産と消費が同一地域で行われること。

食育

都民一人ひとりが自らの「食」について考え、判断し、健全な食生活を実践できるよう普及啓発を行うこと。都の食育推進計画では、「健全な食生活習慣を培うとともに、食への感謝の心を養うものである。また、これらの営みを通じて、健康的な心身と豊かな人間性を育み、生きる礎を形づくる全人格的な取組である」と定義している。

生産緑地

市街化区域内において良好な都市環境の形成に資するものとして、区市が地域地区の一つとして都市計画決定する農地。この制度により市街化区域内の農地は、保全すべき農地（生産緑地）と宅地化すべき農地に区分される。生産緑地に指定されると税の軽減措置を受け一方、営農が義務付けられる。東京では、平成 17 年 12 月現在で 3,703ha の生産緑地がある。



地域ブランド

その地域に存在する自然、歴史・文化、食、観光地、特産品、産業などの地域資源の「付加価値」を高め、他の地域との差別化を図ることにより、市場において情報発信力や競争力の面で比較優位を持ち、地域住民の自信と誇りだけでなく、旅行者や消費者等に共感、愛着、満足度をもたらすもの。

地産地消

地産地消とは、「地域生産・地域消費」の略で、「地域で生産された農林産物をその地域で消費する」という意味。地産地消は、消費者の食への安全・安心志向の高まりを背景に、消費者と生産者の相互理解を深める取組として期待されている。

とうきょう えつくす TOKYO X

都の畜産試験場（現東京都農林水産振興財団青梅畜産センター）が開発した高品質系統豚。バークシャー、北京黒豚、デュロックの 3 品種を交配し、それぞれの長所である「肉が柔らかい」、「脂肪の質が良い」、「霜降りになる」という特徴を併せ持つ。名前には「交雑種（クロス）で、未知の可能性（エックス）を秘めた東京生まれの豚」という意味が込められている。



東京しゃも

都の畜産試験場が開発した高品質鶏。軍鶏とロードアイランドレッドを交配し、産まれた雌(F1)に更に軍鶏の雄を交配し、軍鶏特有の「歯ごたえがあり、旨みと香りが豊かな肉質」を持ちながら、軍鶏と比べて F 1 種鶏は産卵性が高く、また、東京しゃもは気性が穏やかで飼い易いのが特徴。



特別栽培農産物

地域の慣行レベルに比べて、化学合成農薬の使用回数が 50%以下、化学肥料の窒素成分量が 50%以下で栽培された農産物のこと。

土地区画整理事業

土地区画整理法に基づいて行われる、土地の区画・形質の変更、公共施設の新設・変更に関する事業。都市計画区域内の土地について、公共施設の整備・改善および宅地の利用の増進を図ることを目的とする。

農業委員

「農業委員会等に関する法律」に基づき区市町村に設置される独立の行政委員会である農業委員会の委員。公選制の下での選挙委員と、市町村長が選任する選任委員（団体推薦、議会推薦）がいる。

農業振興計画

国の「食料・農業・農村基本計画」（平成 12 年）、農業経営基盤強化促進法の改正（平成 14 年）および、東京都農業振興プラン（平成 13 年）などを背景に、区市町村が農業分野の基本的方向と個別事業などの事業計画として策定するもの。

近年改定されている各自治体の農業振興計画は、長期総合計画や都市計画マスタープラン、商工業振興計画、観光ビジョンなどの個別計画とも関連している。

農業用水路

農作物の栽培に必要なかんがい用水、農機具や収穫物の洗浄用水、家畜の飲雑用水等、農業全般に使用される用水を、上流から幹線用、支線用、小用水と分岐して耕地等に送水する水路。農業用水は、農業生産以外にも防火用水や浄化用水等の地域用水として多面的な機能を有している。

農業用水組合

農業用水の取水施設や水路の維持管理及び水の配分などを行うため、農業者によって組織された組合。大規模な組合は戦後、土地改良区に組み替えられたが、小規模な組合は任意団体（申し合わせ組合）として存在している。

フードマイレージ (food mileage)

食料輸送における環境負荷の指標で輸送距離と輸送量の面から捉えた食料供給の実態と食料輸送が環境に与える負荷の度合いを表す。食料の輸送距離と重量を乗じて算出。イギリスの消費者運動家ティム・ラングが提唱したフード・マイルズを参考に、農林水産省農林水産政策研究所が考案。〔マイレージはマイル数、走行距離の意味〕

保存樹・保存樹林

都市における美観風致の維持を図るため「都市の美観風致を維持するための樹木の保存に関する法律」に基づき、都市計画区域内の樹木または樹木の集団について区市町村長が指定するものと、地域で親しまれてきた老木や名木、あるいは良好な自然環境を残す樹林などを、区市町村の条例等により指定保存するものがある。

道の駅

一般道路沿いに設けられた休憩施設。駐車場等の休憩施設と資料館等の地域振興施設が一体となり、休憩・情報提供・地域連携等の機能を持っている。平成 19 年 8 月現在、全国に 868 か所の「道の駅」が登録されている。東京都では、平成 19 年に初めて八王子市に整備された。

農業・農地を活かしたまちづくりガイドライン

平成 20 年 3 月 発行

編集・発行 〒163-8001 東京都新宿区西新宿二丁目 8 番 1 号
東京都産業労働局農林水産部農業振興課

☎ : 5320-4831 fax : 5388-1456

<http://www.sangyo-rodo.metro.tokyo.jp/norin/index.htm>